289
289-Ko94-2ウ
1200500732035
複写

徳秋水の思ひ出

師岡千代子著

始

100
194

納本

夫幸德秋水の思ひ出

師岡千代子著

〔光風叢書〕

東洋堂版

2F9
K694-2

師岡千代子著

夫幸德秋水の思ひ出

東洋堂版

1008
194

目次

先祖・父母・兄弟・親戚のこゝろ……1
秋水の幼年時代……24
齋藤緑雨氏の思ひ出……53
小泉三申氏の追憶……72

幸德秋水の思ひ出

——先祖・父母・兄弟・親戚のことども——

師岡千代子

家系に就いて語ると云ふことは、封建的な思想の殘物であるかも知れない。況して自由人であつた秋水の思ひ出を語るのに、世間並に家系の詮議から始めることは、餘りにも似合はしからぬことであらう。それにまた秋水の先祖や親族を麗々しく人に告げたとて、今更ら秋水に箔のつく譯でもなからうから、或ひは書かざるにしくはないかも知れない。しかし秋水とても若かりし日には、自分の家系に對して、多少の關心をもつて居たことは事實である。私に幸德家の先祖の名を敎へたのは秋水である。いや私は、秋水が自分の家系に對して、多少の自負をもつて居たこと

を知つて居る。今私が順序として幸德家の家系に就いて語つたとて、別に地下の秋水の機嫌を損ねはしないであらう。とは云へ、他家から嫁いだ私が、幸德家の家系に就いて詳しく知らう筈がないから、秋水の隱れた環境の一端を知る便にもと、唯だ家系に纏はる思ひ出を書き記すに過ぎない。

よく人から、秋水は土佐の何處の生まれかと訊かれるが、秋水は高知縣幡多郡中村町の出身である。秋水の生まれた幸德家は、古くから同地に土着する鄕士であるが、代々多少の羽振りを利かした家柄であると聞いて居る。試みに姻戚關係を辿つて見るならば、土地でも屈指の家柄が多く數へられるやうである。そして中には、世に時めく人も幾人か見受けられる。しかし今はそれらの人々の迷惑を慮つて、殊更らにその名を揭げることを差し控へて置かう。唯だ時事新報の安岡として新聞界に知られた安岡秀夫氏だけは、氏の生前すでに秋水の親戚であることを、躊躇なく世間に告げられて居るのだから、その名を揭げたとて別に差し支へなからう。

安岡秀夫氏は秋水の母方の近戚にあたる人であるが、後に述べるやうに、秋水の幼な友達であつたばかりでなく、少年時代の唯一の競爭相手であつたと云ふことである。更らに、氏が晩年に

書かれた『雲のゆくへ』と云ふ思ひ出の記は、秋水に關する貴重な文獻の一つであらう。安岡氏の父君である安岡良亮氏は、人の知るやうに熊本縣令として世に時めいた人であるが、明治九年十月廿四日に熊本で神風連の暴動が起つた時、安岡縣令が虐殺されたことは餘りにも有名な話しである。この安岡良亮氏の妹英子が秋水の母の弟の妻である。從つて、安岡縣令は秋水の義理の伯父にあつて居る。誰れであつたか、神風連の暴徒の手で虐殺された安岡縣令の妹が、秋水の母であるかのやうに述べて居られるのを見たことがあるが、それは上述の事實を誤り傳へたものである。

安岡氏の父君が、私の父の師岡正胤の友人であつたことを、私は結婚後安岡氏から聞いて初めて知つた。それに就いて思ひ出すことは、明治の初年に私の父が彈正臺に職を奉じて居た頃、父宛に寄せられた九條道孝公の手紙のことである。その手紙は何時までも私の生家に保存されて居たが、何時であつたか何心なく讀んで見た時、その文中に安岡氏の父君の名を見受けて、私はひとり秘かに微笑むだことがあつた。家に歸つてそのことを秋水に話すと、秋水は緣は異なものだと呟くやうに云つてから、熊本に於ける安岡縣令の劇的な最後に就いて、幼時から傳へ聞いて

居だことを物語つて呉れた。そして安岡氏の父君は、中村町の出世頭だと云ひ添へたことを記憶して居る。

私の生家の師岡と云ふ姓も餘り類のない姓であるが、好く人から云はれるやうに、幸德と云ふ姓は他に聞いたことのないほど珍らしい姓である。しかし秋水の話しに據ると、最初から幸德姓を名乘つて居たのではなかつた。何んでも幸德家の先祖は、安倍晴明の末裔で幸德井某と云ふ人である。幸德井と書いて『かでゐ』と讀むのだから、これはまた珍らし過ぎるほど珍らしい姓と云はねばなるまい。後にその幸德井の井の字を取り去つて、初めて幸德姓を名乘るやうになつたのであるが、それが何時頃のことであつたのか、それに就いては別になにごとも聞いては居ない。しかし幸德井姓を名乘る人の墓が殘つて居るであるから、私には然う〳〵古い時代のことゝも考へられない。

幸德家の先祖である幸德井某なる人は、もと京都の公家の一人であつたと云ふことであるが、何んでも代々陰陽師であつたと云はれて居る。安倍氏の流れを汲むのだから、それは當然すぎるほど當然なことであらう。しかし國學者の娘として古臭い教育を受けた私は、何う勘違ひしたも

のか子供の頃から、陰陽師は古い繪卷物や王朝時代の物語に、影のやうに登場する怪しい人物であるとばかり思つてゐた。まさかその子孫に依つて、自分の生涯が決定されやうとは夢にも考へなかつた。で、何時であつたか互ひの家系に就いて語り合つた時、幸德家の先祖が陰陽師であると秋水その人から聞いて、私はその愚さを知りながらも妙に氣味惡く感じたが、秋水は私の顏を見ながら唯だにや〳〵と笑つてゐた。その時、私は裝束を着けて御幣を手にする陰陽師姿の秋水を、我れともなく心の壁に描き出したことを記憶して居る。ありし日の秋水を知つて居る人々は、秋水の思ひ出と共に、私のこの心ない想像の圖を苦笑するであらう。

私が陰陽師の裝束を着せた秋水の外貌に就いて、餘談ながら此處で少しく述べて見やう。秋水は誰れからも云はれるやうに小柄な人間であつた。そして瞥見では判らないが頭だけは優れて大きかつた。顏の色は土佐人らしく何處か淺黑かつたが、切れの長いその眼は吊り上がつて居るばかりでなく、底力のある烱々たる光りを帶びてゐた。私の口からこんなことを云ふのは妙なものであるが、考へて見たゞけでは物凄く思はれるその眼には、人を魅するやうな不思議な優しさが潜んでゐた。恐らくそれは、誰れが見ても實際には一重瞼でありながら、寫眞には必ず二重瞼と

して現はれる處に、その不可解な意味深い謎があるのであらう。そして高い鼻と濃い眉と色の好い唇とが、その顏に一種の氣品とも云ふべきものを與へてゐた。しかし何時も油斷なく正眼に構へて居て、他人に虛を與へない容貌であつたことは事實である。從つて秋水を利用しやうとする人々には、何處か近付き難いところがあつたに相違ない。可笑しなことには、初めての小兒などは秋水にあやされると、すぐにわつと大聲を上げて泣き出すのが常例であつた。これには秋水も閉口して居たやうであるが、秋水の笑顏は苦笑と選ぶところがなかつた。頑是ない小兒はともかくとして、何時も多少の敬意を以つて人々に慕はれて居たやうだから、性格的に何處か人を引き付ける處があつたのであらう。

幾代かの末に秋水を生んだ先祖の陰陽師が、はる〳〵土佐國の中村に住むやうになつたのは、人に語るやうな香ばしい理由に依るのではなかつた。この人は餘り身分を忘れて放蕩三昧に日を送つたので、京都の地からそんな遠隔な地に流謫されたと傳へられて居る。それにしても、殊更らに中村の地が選ばれたと云ふことは、若しかすると、この人は一條家に關係があつたのかもしれない。誰れでも知つて居るやうに、土佐國の中村と云ふ土地は京都から遠く離れて居ながら、

古くから一條家が特殊の勢力を振つて居た處である。尤も先祖の流謫が何時頃のことであつたのか、私は全然聞き洩らして居るので、それに就いては何にも語ることが出來ない。しかしいろ〳〵な事實を綜合して考へて見ると、餘り古い時代のことであるとも思はれない。恐らくそれは一條家が中村の地に勢力を振ひ出してから以後のことであらう。

微かながらも、幸德家と一條家との關係を物語る事實に就いて、私には忘れることの出來ない思ひ出がある。父祖の誰れかゞ一條家から拜領したと云ふ驢馬の床置物が、古くから家寶として幸德家に傳へられてゐた。私は嫁いでから間もなく、母から恭しく謂因緣を聞かされると共に、青銅細工のその置物の保管を委任された。或る日、函から出して床に飾らうとすると、何うしたことかその驢馬の耳が一つ折れて居るので、私は泣き出さないばかりに蒼くなつて狼狽した。すると、珍らしくも秋水は腹を抱へて笑ひ出した。そして稍してから、依然として笑ひながら語るところに據ると、秋水が極く幼い頃、手悪戯をしてその驢馬の耳を折つたとのことである。私は自分の狼狽振りを心なく笑はれたので、怨めしさの餘り泪を溜めて秋水の顏を見詰めて居たが、秋水は飛んだものゝ保管を委任されたものだと、何にがそんなに可笑しいのか、再び聲を立てゝ

笑ひ出したことがある。

流謫された人の父であつたかそれとも祖父であつたか、とにかく幸德井姓を名乘る先祖の一人の墓が、大阪市の福島邊りの寺にあると云ふことを、秋水は早くから聞き知つて居たやうである。しかしそれが果して何んと云ふ寺にあるのか、何時までも疑問のまゝ殘されてゐた。ところが、明治卅九年に秋水が米國から歸朝した時、私には最初の秋水には久方振りでの土佐への歸省の途次、私を伴つてその墓所探しをしたことがある。そして八月の炎天の下を俥に搖られながら、根氣好く寺から寺へと歩き廻つた末、福島の竹林寺で漸く探しあてた墓前に、何等の儀式もなく簡單に夫婦で額づいたが、それは餘り大きくもない古びた一基の墓碑であつた。しかしその墓銘は何んと書いてあつたのか、今はそれが二行に書かれてあつたことを記憶して居るばかりなので、一々の文字は最う私の記憶から消え失せて了つて居る。唯だそれを小聲で讀んで居る秋水の姿だけが、今猶昨日のことのやうにありゝゝと眼に浮んで來る。

私の嫁いだ頃には、幸德家は藥種商の他かに酒造業を兼ねて居たが、藥種商の方が代々の家業であつたとのことである。そしてその藥種商は、幸德家に相應はしい傳說を以つて飾られて居

る。即ち陰陽師であつた先祖の幸德井某が、流謫の身のつれゝゝを慰める爲めに、下男一人を伴につれて自ら附近の山野を歩き廻つて、人助けに草根木皮を求めたに起因すると云はれて居る。その結果、先祖の日から多少の人望を集め得たと傳へられて居るが、家傳藥と云ふやうなものも幾つかあつたやうである。しかし秋水はその全生涯を通じて幸德家の家業とは直接關係のなかつた人間である。

興味のない上に少し入り組んで居るが、順序として私の嫁いだ當時の幸德家に就いて述べて見やう。秋水の父は幸德篤明と云ふ人である。何んでも算盤勘定に疎かつたこの人が、幸德家の家運を大分傾けたやうに聞いて居る。餘談ながら、幸德家の一族に桑原戒平と云ふ人があつた。小笠原島の島司をしたことのあるこの人が、明治の初年に伊豫の何處かの銅山を手に入れて、その採掘資金を一族の間に募つたことがある。篤明が家運を傾けたそもゝゝはその銅山の爲めであるが、母の話しに據ると、幸德家の親族で沒落の悲運にある人々は、總て皆なこの人の事業に參加したものゝやうである。蔭でこそ回顧的な非難を受けて居たが、それでもこの人はその棺に釘を打つてから後も、全親族から不思議なほど尊敬されてゐた。私の嫁いだ頃には、最う白髮童顏の

好い加減の老人であつたが、見るからに何處か剛腹な人であつたやうに記憶して居る。如何にも尊大なこの人だけは、何時までも秋水を鼻垂れ小僧扱ひにしてゐた。さすがの秋水もこれには參つて居たやうであるが、時には吹き出したくなるやうなことさへあつた。

篤明の兄に勝右衞門と云ふ人があつたが、この人は秋水の兄の龜治に自分の跡目を相續さして居る。私の嫁いだ頃には、最うとつくにこの伯父の勝右衞門は死んで居たから、私はこの人に就いて殆んど何にごとも知らない。秋水は篤明の次男にして末子であるが、他に男女三人の同腹の兄弟があつた。民野、龜治、牧子、傳次郎（秋水）の順である。中には、秋水のやうに生れながらにして虚弱な者もあつたが、ともかく子供達は孰れも無事に成人して居る。秋水より先きにこの世を去つた兄弟は、五つ違ひの兄の龜治唯だ一人だけである。龜治が長い間苦しんだ宿痾の爲めに死んだのは、まだ春秋の氣に富んだ卅八歳の時であつた。尤も民野と龜治とは六つ違ひであるから、その間が少し離れ過ぎて居るやうでもある。しかしその間に夭折した子供があつたのなら、あの子煩惱の母が何にか話しさうなものであるが、母はもとよりのこと、私は誰れからもそんなことを聞きはしなかつた。

可笑しなことには、父母を同じくするこの四人の兄弟が、何故か體格的に妙な對立をなしてゐた。即ち兄の龜治と次姉の牧子とは、何方かと云ふと大柄な方であつたが、その反對に、長姉の民野と秋水とは小柄な方であつた。大柄な龜治と牧子には各自一人づゝの子供があつたが、小柄な民野と秋水には遂に子供のなかつたのも、不思議と云へばまことに不思議である。想ふに、母の多治子が小柄な人であつたから、長姉の民野や秋水は母に似たのであらう。そして兄の龜治や次姉の牧子は、早く世を去つた父の篤明に似たのではなからうか。とは云へ、私は父に就いては全く何も知らないのだから、唯だ單に想像するばかりで斷言することは出來ない。しかし何んだかそんなことを聞いたやうな氣もする。まさかその爲めではなからうが、母は自分に似て居ない大柄な他の二人よりも、小柄な民野と秋水を愛して居たやうである。恐らくそれは、民野は長子であり秋水は末子であつたからであらう。就中、秋水に對する母の愛情は特別なものであつたが、後に述べるやうに、秋水は他のいろ〳〵な點に於いても、何うやら母の血を濃厚に受けて居たやうである。

民野と牧子とは、後に孰れも嫁して他家の人となつて居る。即ち民野は福島家に牧子は谷川家

に嫁して居るが、母となつたのは牧子が一人だけである。前にも云つたやうに、伯父の勝右衛門には妻淺子との間に實子がなかつたので、秋水の兄の龜治が幼少にして養嗣子となつたが、これは秋水の誕生に依つて、豫ての約束が實現されたやうに聞いて居る。その結果篤明の家督は末子の秋水が相續することになつたのである。しかし篤明がこの世を去つたのは、家督相續人の秋水の僅か二歳の時であつたから、番頭の駒太郎を養子として家業を監督せしめた。他家から入つて幸德家の人となつたこの駒太郎の子孫が、今日中村町で榮えて居る幸德家である。從つて幸德姓を名乘つて居るとは云へ、秋水とは何等の血の繋りもない人々である。

幸德家の血統は、先年佛蘭西から歸朝した放浪の洋畫家幸德幸衛が、酒精中毒で大阪市に於いて客死した時、表面的には全く絶えて了つたことになつて居る。しかし幸衛の話しに據ると、米國に幸衛の子供が二人あると云ふことである。後に改めて述べるやうに、幸衛は秋水の兄の龜治の唯一の遺子であつて、幸德家の掛け替へのない後繼者であつた。尤も谷川家に嫁した姉牧子に娘が一人あつたから、幸德家の血統は幸衛と牧子の子孫に傳はつて居ることになる。斯うした事情で、單に幸德姓を名乘つて居る者はあつても、幸德家の血を受けて幸德姓を名乘つて居る者

は、最う日本の國内には存在しないのである。よく人から、秋水には眞實に子供がなかつたのかと訊かれるが、秋水に子供がなかつたことは事實である。

秋水は父の篤明に就いて、全然と云つて好いほど何にも話したことがなかつた。前にも述べたやうに、篤明の死んだのは明治五年であつたが、それは秋水の僅か二歳の時であつたから、秋水には語るべき何もなかつたのであらう。たとへ人から傳へ聞いて居ることがあつても、所謂人聞きであつて直接的なものでないだけに、私に向つて語る興味すらなかつたのであらう。何時であつたか私は秋水に向つて、父の顏を覺えて居るか何うかと無遠慮に訊ねたことがある。その時、秋水は覺えて居ないと唯だ簡單に答へたゞけで、別に父を懐しむやうな容子もなかつた。そして稍してから、なまじ覺えて居たら懐しさを感ずることもあらうが、少しも覺えて居ないのだから氣楽なものだと云つた後で、しかし子供の時には、父のない子としての悲哀を味はつたこともあると、何にごとかを思ひ出したやうに附け加へて云つた。私は感傷的な氣持になつて思はずほろりとしたが、秋水は何ごともなかつたやうに書物の頁を繰つてゐた。

秋水ばかりではなく、何故か母も父に就いては殆んど何にも語らなかつた。秋水や母の生きて

居る頃でさへ、このやうに、すでに忘却の彼方に押しやられて居た人であるから、今となつては篤明に就いて多くを知らうとしても、最早や不可能であると云つても過言ではなからう。そんなことから、私は秋水の父の輪廓すらも描くことが出來ない。しかし私の想像するところでは、篤明は家運を傾けるほど專盤勘定には疎かつたが、一面に於ては、必ずしも學者とまでは云はれないにしても、田舍には稀らしいほど文字に通じた人であつた。このことは學者であつた母の父が、卽ち秋水の外祖父が婿としたのを見ても推測される。

事實篤明には、『大平ひとつばなし』と云ふ未刊の著書があつた。それは土佐半紙三四十枚を一冊に綴つて、青い表紙を付けた凡そ十冊位の書物である。後に述べるやうな事情で、この書物のことを知つて居る人は餘りないかも知れない。內容に就いては、私も拾ひ讀みをしたゞけで詳しくは知らないが、見聞に據る隨筆めいたものであつたと記憶して居る。卽ち何時何日何處で誰れそれが狐に訛されたとか、何處そこで生捕つた猪は稀れに見る大きなものであるが、それを生捕る時には何人の獵人が負傷したとか、何年何月何日に何處の港に黑船が現はれて、人民が何んな驚ぎをしたとか云ふやうなことを、見事な筆跡で如何にも丹念に書き連ねてあつた。そして所

々に風雅な挿繪が描かれて居たが、それも篤明の筆になるものだと聞いて居る。

この書物は母の秘藏にかゝるものであつて、秋水とても猥りに持ち出すことは許されなかつた。毎年土用になると、母が手みづから一冊々々大事さうに虫干して居たが、それが濟んで了ふと、また自分で何處かへ仕舞ひ込んで了つて、人に見せることさへも惜んでゐた。しかし今になつて考へて見ると、母にとつては自ら闇に葬つて滿足して居るこの書物が、良人の唯一の遺品であつたのかも知れない。しかもそれが良人の著書であるだけに、傍目では可笑しいほど神聖視して居たのであらう。それだからこそ、他のことでは餘り物惜しみをしない母が、人手に觸れることさへ嫌がつて居たのであらう。ところが、何故か秋水はこの父の著書に對して、不思議なほど敬意を表して居なかつた。秋水のことであるから、一度は必らず通讀したに相違なからうが、何故あんなに冷淡な態度を示して居たのか、私には今猶解くことの出來ない謎として殘つて居る。

毎年のやうに、秋水はそら始まつたと云はぬばかりに、皮肉な笑みをにや〳〵と浮べながら、父の著書の虫干しに從事する母の姿を眺めてゐた。恐らく母には、秋水のその態度が氣に入らな

かつたのであらう。一度などは、その爲め母の機嫌を損ねてしまつたことがある。その時、秋水が殊更に拜觀と云ふ皮肉な言葉を使用しながら、母に向つて冗談めかしく云つて居たやうに、一年に唯だ一度だけしか拜觀出來ないと云ふことが、秋水には可笑しくてならなかつたのであらう。しかし善良な母には、秋水の然うした冗談が通じた容子もなかつた。やがて虫干しを終ると、母はまた翌年の夏を約束するかのやうに、その書物を何處かへ自分でさつさと仕舞ひ込んで了つたので、思はず夫婦で大笑ひをしたことであつた。

秋水の父の面影を傳へる唯一のものであるこの書物は、母の死後何うなつて了つたのであらうか。その後、中村町の幸德家が火災に逢つたと聞いて居るから、秋水の誕生したあの古めかしい家と共に、惜しくも灰燼に歸して了つたかも知れない。恐らく今では最うそんな書物のあつたことも、それが秋水の父の著書であることを知る人もないであらう。しかし私は、ろく〳〵讀んで見ることも出來なかつたその書物が、今でも一種の懷しさを以つて思ひ出される。そして闇から闇へ葬り去られて居るその書物が、若しも今猶何處かに存して居るならば、返らぬ日の思ひ出に、今度こそ堪能するまで讀んで見たいと思つて居る。

秋水の母である多治子は、中村町からほど遠からぬ地の小野氏の出である。小野氏もまたその地に古くから土着する鄉士で、人々から多少尊敬されて居る家柄であつた。母の父なる人は即ち秋水の外祖父は、學者にして名醫の名を恣にした人であつたと聞いて居るが、恐ろしく封建的な女性觀をもつて居た人のやうである。母の話しに據ると、この人は婦女子に餘り文字を教へることは、戀ひ文その他情事に利用するに過ぎないから、婦女子には全然學問の必要を認めないと、日頃口癖のやうに云つて居たさうである。從つて母の教育もその方針に依つてなされたのであるが、早く生母に死に別れた多治子は、その幼時を母方の祖母に依つて養育されたとのことである。

多治子は十七歳の時に嫁して幸德家の人となつたが、嫁入り當時の母は餘り初々しかつたので、家人が毎日のやうに雙六の相手をして、振袖姿の母の機嫌を取つて居たと云ふことである。私に母の花嫁時代の話を聞かせて呉れたのは、母には良人の兄嫁にあたる伯父勝右衞門の妻である。その伯母の語るところを聞けば聞くほど、母が如何に素直に生ひ立つた人であるかゞ判つて、母の娘時代が何んとなくゆかしく感じられてならなかつた。しかし幸福な新婚の日も何時し

か過ぎ去つて、やがて算盤勘定に疎い良人篤明への内助の日が續いた。そして秋水を末子とする四人の子供達の母となつた時、良人の死と云ふ思ひ掛けない不幸が、無慈悲にも突然母の上に襲ひかゝつて來た。

秋水の父である篤明がこの世を去つたのは、多治子がまだ女盛りの三十三歳の時であつた。昔から三十三歳は女の厄年だと云はれて居るが、餘談ながら、それに就いて私にも悲しい思ひ出がある。結婚當初から秋水は私に向つて、お前も三十三歳になつたら後家になるのだから、今からその覺悟で居ろと好く云つてゐた。恐らく自分の不健康さを意識しての言葉であつたらうが、そんな時、母は自　の苦しかつた半生を物語りながら、後家の苦勞は後家になつた者が好く知つて居ると、秋水の餘りにも心ない冗談を窘めて居た。しかし私は、何んとなく不安ではあつたが餘り屢々なので、そんなことを差して氣に止めては居なかつた。ところが、一つや二つの年齢の違ひこそあれ、秋水のこの冗談めいた悲しき豫言は、遂に複雜な形態で事實となつて現はれたのである。しかしそれに就ては、後に改めて詳しく述べることにしやう。

父の死後、母の辿つた路は崇高なる犧牲の生涯であつた。父がこの世を去つた時、長女の民野

は十三歳であり次女の牧子は五歳であつたが、長男の龜治は七歳であり末子の秋水は二歳であつた。母は人々から幾度か再婚を勧められたが、遺された四人の可憐な者の爲めに、人々の心ないその勧めを固く拒絶した。そして健氣にも幸德家の中心となつて、その前後から傾き掛かつた家運の挽回に、夜もろく〳〵眠らずに努力したと云ふことである。果敢な母は、家族一同の衣類一切を木綿着に改めて、表付きの下駄などは履きも履かしもしなかつた。當時の母には、一寸の絲切れも子供達への織物の代であつた。斯くて父ありし日の華やかな生活の夢は消えて、儉約に儉約を以てする苦難の日が續いた。

前にも述べたやうに、先祖の日から家業が藥種商であつた關係上、絶えず大阪商人と取り引きして居たが、船の都合で眞夜中に不意に荷が着くことが屢々あつた。以前は全くの奉公人任せであつたから、この眞夜中の着荷では、面倒な問題の起つたことも稀れではなかつた。しかし父の死後は、何んな眞夜中でも何時も母が起きて居て處理したので、然うした問題は跡を絶つたばかりではなく、幸德のお多治さんは夜眠らないのかと、驚異を以つて人々から云はれるやうになつた。事實毎夜のやうに、曉方近くまで母の織る手機の音が聞えてゐた。これは當時の母を物語る

唯だ一例に過ぎないが、子供達の成人するまでの母の苦勞は、それを傳へ聞く私達の想像以上のものであつたらう。秋水は斯うした母の苦勞もろく〳〵知らずに、末子として誰れよりも愛されながら成長したのである。

後年母は好くその頃を回顧して、私の苦勞を知つて居るのは民野だけだと云つてゐた。父の亡くなつた時、長姉の民野はすでに十三歳になつて居たから、事實母の苦勞を察することも出來たであらう。そして多少の手助けにもなつたことであらう。この苦難期に母を助けて幸德家の爲めに盡した者は、秋水の父の死と共に、番頭から引き上げられた養子の駒太郎である。駒太郎は幸德家の養子となつてからも、自ら奉公人の地位に甘んじて終始した人である。小さいながらも立志傳中の人である駒太郎こそは、幸德家を語る上に忘れることの出來ない人であると共に、確かに幸德家の恩人と呼ばれて然るべき人である。秋水は意志の强いこの駒太郎を批評して、若し駒太郎に充分の學問があつたなら、必ず星亨以上の人物になつたらうと云つてゐた。

秋水は自分の最後の直前に母の死を傳へ聞いた時、獄中から堺利彦氏に無量の感慨を込めた書を寄せて、感謝の意と共に賢母の名を以つて母を呼んで居る。幸德家の中心となつて四人の子女

を養育した母は、そしてその後も、あの苦難の日に少しも取り亂さなかつたばかりではなく、却つて獄中の秋水を慰めて居た母は、確かに秋水の云ふやうに賢母に相違ない。世間には物好きな人があつて、秋水の母が自殺したかのやうに云ひ傳へて居るが、母が病氣でこの世を去つたのは事實である。しかし獄中で突然母の訃報に接した秋水も、人の知るやうに時が時であつたゞけに、一時はその死因を深く疑つたやうである。その時、秋水から堺利彦氏に宛てて自分の心情を述べた長い手紙は、如何にも好く母の性格の隱れた一面を告げて居るから、その一節を參考までに引用して置かう。——

『僕が日糖事件のやうな事で入獄したなら、假令輕罪でも、母は直ぐ自殺したかも知れぬ。今度の大罪にも、無論非常の苦痛を感じたであらうが、併し是は僕の迂愚から起つた事で、一點私利私慾に出でなかつた事だけは、母も諒解してあきらめてくれたらうと思ふ。單に之を恥ぢたとか悲觀したとかで自殺する事のないのは僕は善く知つて居る。萬々一ほんとに自殺したのなら、其理由は一つある。卽ち僕をしてせめてもの最期を潔くせしめたい。生殘る母に心をひかされて、女々しい未練らしい態度に出でないやうにとの慈愛の極に外ならないのだ。此理由に於い

ては、或は双に伏す事も藥を仰ぐ事も爲しかねない氣質であつた。』云々

しかし、斯うした非常の日の母はともかくとして、私が幸德家に嫁いだ頃の母は、最う年齡が年齡であつたから、寧ろ慈母の名に相應はしい人であつた。就中、他家から嫁いだ私への慈しみは、今猶思ひ出しては限りもなく感謝して居るが、それは人々から羨まれる程のものであつた。後に述べるやうな事情の爲めに、止むなく私が師岡姓に復歸してからも絶えず母からは慰めの手紙を受け取つてゐた。一度などは、何うかして私が母への返事を怠つた爲めに、母が私の安否を心配して訊ねて來たから返事を出せと、秋水から手紙で譴責されたことさへあつた。それは曾て共に樂しく暮らした三人の者が、即ち母は土佐に、秋水は東京に、私は大阪に離れ〳〵に暮らして居た日のことであるが、人の知るあの恐怖の日はそれから間もなくのことであつた。

この母に對する秋水の並ならぬ孝養は、今日では世間周知のこととなつて居るが、妻であつた私さへ美しく感じたことである。『鳩鳥喚晴烟樹昏、愁聽點滴欲消魂、風々雨々家山夕、七十阿孃泣倚門。』これは秋水が晩年獄中から母に送つた詩であるが、秋水の詩の中には、母を詠じたものが幾つか殘つて居る。母が死んだのは明治四十三年十二月二十八日であるが、すでに七十二歳

の高齡であつた。『獄裡泣居先妣喪、何知四海入新陽、昨宵蕎麥今朝餅、添得罪人愁緒長。』と母の死を悼んだ秋水も、人の知るやうに、それから一ヶ月經ない中にあの悲壯な最後を遂げて居る。

秋水の幼年時代

他家から嫁いだ私は、幼少の日の秋水に就いて然う多くを知らない。唯だ秋水の生ひ立ちに關係のあつた人々から、時々の茶話として、統一もなく傳へ聞いたに過ぎないのである。そしてその斷片的な逸話の數々を寄せあつめては、ひとり秘かに秋水の幼少の日の面影を、あれこれと想像を加へながら心の壁に描いてゐた。しかもその人知れぬ心の寄木細工は、曾ての日のごとなき樂しみでもあつた。しかし七十歳を過ぎた今日では、最う私の記憶も衰へ果てゝ了つたから、その幾分かを切れ〳〵に語り得るに過ぎない。改めて訊いて見やうにも、曾て私にそれらの逸話を物語つて呉れた人々は、すでに總て皆な地下の人々となつて了つて居る。親しげに秋水の幼名を口にしながら、何時までも秋水を子供のやうに取り扱つて居た人々は、最う何處を探しても一人だに生存して居ない。して見ると、それらの人々から傳へ聞いた私のこの朧げた思ひ出でさへ、幼少の日の秋水を傳へる上に多少は役立つかも知れない。とは云へ、私は秋水の幼少の日に

就いて直接何にも知らないのであるから、唯だ傳へ聞いた逸話に纏はる思ひ出を書き記すに過ぎない。

秋水は明治四年九月二十三日に、現在の高知縣幡多郡中村町に於いて誕生して居る。父は篤明、通稱嘉平次、母は多治子、小野氏の出である。秋水の生まれた時には、すでに二人の姉と一人の兄とがあつた。父母を初め周圍の人々は、秋水がまだ母の胎内で蠢いて居る頃から、男の兒であれかしと切に願ふて居たさうである。父の兄である勝右衞門の妻淺子の如きは、氏神樣に日參して男子出生を祈つたとまで云はれて居る。で、呱々の聲を上げた秋水が男の兒であつたから、父母の喜びは云ふまでもないことであるが、殊に伯父勝右衞門夫婦の喜びは大きかつた。實子のなかつた勝右衞門夫婦は秋水の誕生に依つて、豫て秋水の兩親と約束してあつたやうに、秋水の兄の龜治を養嗣子に迎へることが出來たのである。反逆者として世の人々の雷同的な呪詛の中に悲壯な最後を遂げた秋水は、このやうに人々の祝福の中に誕生した人間である。

私が幸德家に嫁いだ頃には、まだ幸德家の人々は秋水の誕生したと云ふ家に住んでゐた。それは中村町の眞中近くに存在して居たが、如何にも由緒ありげな古めかしい家であつた。しかし秋

水の死後間もなく、その家は火災に遭つて灰燼に歸したと聞いて居る。して見ると、黒い大きな柱がぴか〳〵光つて居たあの古めかしい家も、今では最う若干の人々の心の幻となつて殘つて居るに過ぎない。時が經つに從つて、一つ〳〵失はれて行く秋水に關係あるもの〻中でも、これはまた最も惜しいもの〻一つであると云へやう。少なくとも秋水の思ひ出を抱く者には、云ふべからざる一種の寂しさを感ぜしめる。

誕生後間もなく、秋水は人の知るやうに幸德傳次郎と名附けられたが、母の話しに據ると、その傳次郎と云ふ名は他人から附けて貰つたもので、兩親の附けた名ではないと云ふことである。何んでも中村町に貧乏で澤山の子供のある人があつたが、其家の子供達がいづれも無病息災に育つて居るので、それに肖かる爲めに、餅と酒を携へて行つて命名して貰つたのである。その後も秋水が七歳の袴着の祝ひまでは、命名親として毎年餅を搗いて、贈つてゐた。あんなにも力强く迷信の打破を叫んだ秋水が、その誕生の日にこんな迷信で飾られて居るのだから、何んとなく皮肉でもあれば愉快でもある。それにしても、わざ〳〵貧乏人に名を付けて貰つた秋水が、遙か後年になつて、自分から進んで無產階級の戰士として世に立つたと云ふことは、何んだか不思議な

因緣があるやうな氣もする。

青年の日に、中江兆民先生から與へられた秋水と云ふ雅號は、ひどく秋水の意に適つたものであつたが、この傳次郎と云ふ名は、何う云ふものか餘程氣に入らないらしかつた。何うかすると母や私に向つて、自分の名の安値さを冗談めかしく託つことがあつたが、可笑しなことには、母までが不思議なほどそれに同感の意を表してゐた。いや秋水よりも、寧ろ母の方がその安値さを託つことが多かつた。一杯機嫌の時など、秋水は變に意地惡く母の顏を見ながら、酒の他かに餅までやつたと云ふのだから、最う少し何んとかした名を付けて呉れさうなものだが、何うも酒の量が少なかつたらしいなど〻、柄にもない冗談を云つてゐた。尤もそれは結婚當初のことであつて、後にはそんなことなどに餘り拘泥しなくなつた。

他人の健康に肖からうとした折角の親心も、秋水の健康には何んの役にも立たなかつた。秋水は生れながらにして虛弱な小兒であつた。何時も腹ばかり下して居たさうであるが、幾歳になつても、盥に襁褓の山が積まれるので、秋水の健康が母の嘆きの種であつたと云ふことである。母はかぼそい聲で呼吸も絶え入るやうに泣く、頭ばかり大きな骨と皮ばかりの秋水が、無事に育つ

か何うか疑問にして居たさうであるが、然うした疑問をもつことが恐ろしかつたと云つてゐた。

人並外れたこの身體の虚弱さは、秋水の全生涯を通じて附き纏ふたものである。秋水自身も餘り不健康に惱む時など、こんな弱い身體を生んで呉れなければ好かつたと、冗談めかしく託すことが屢々あつた。そんな時、母は改めて病弱な幼時の養育の苦心談を繰り返して、秋水を心から恐縮さして了ふのであつた。

秋水は餘程大きくなつてからも、戸外に出て遊ぶことは滅多になかつたと云はれて居る。何時も暗い家の中に閉ぢ籠つて居て、唯だひとりで何にか手悪戯をして遊ぶか、繪草紙や錦繪を眺めたりして日を送つて居たが、極く幼ない頃から、繪草紙や錦繪を弄ぶことは特に好んださうである。文字を知つてから後は、ます〳〵家に閉ぢ籠るやうになつたばかりではなく、今までの子供らしい手悪戯などは止めて了つて、年に似合はぬ口數の少ない考へ深げな子供になつて行つた。そして家に傳はる書籍が繪草紙や錦繪に代つたが、幾人かの文字の人を出したと云ふ幸德家には、父祖の讀んだ漢籍類が多少はあつたやうに聞いて居る。

私が嫁いでから後も、秋水は非常に外出嫌ひな人間であつたが、多忙の身にはそんな我が儘は

許されなかつた。しかし秋水の並外れた出不精は、讀書を好む故も多少はあつたらうが、それよりも寧ろ身體の不健康であつたことに原因して居るであらう。實際今になつて見ると、あの不健康さで好くも勉めたものだと、多忙であつた當時を回顧して染々と氣の毒になることがある。餘談ながら、秋水は稀れに見るほどの入浴嫌ひの人間であつたが、秋水に入浴して貰ふのは並大抵の努力ではなかつた。母などの話しに據ると、小兒の時から然うであつたと云ふことであるから、これは先天的に近いものであつたらしい。幼少の日の秋水は、他のことでは極く從順な小兒であつたのに、何うしたことかいざ入浴となると泣き喚きながら必死となつて抵抗したさうである。

母は好く幼少の日の秋水を語る時、何處の家の小兒でも、毎日のやうに下駄の鼻緒を切つたとか、齒を缺いたとか云ふのに、秋水の下駄だけは何時までも眞新しかつたのが、腹立たしくもあれば悲しくもあつたと恰も現在のことのやうに嘆きの吐息を洩らしてゐた、しかし秋水は私に向つて、小兒の時に木登りが得意であつたと自慢したことがあるから、幾ら病弱だと云つても、男の兒はやはり男の兒だけあつて母の知らぬ間に、何處かで習ひ覺えたそんな隱し藝があつたのであ

らう。私がこのことを母に話した時、母は意外だと云ふやうに眼を大きく瞠いて居たが、秋水がまだ幼ない小兒であるかのやうに、やがて慈しみ深く滿足げな笑みを浮べたことを記憶して居る。

想ふに、幼少の日の秋水が戸外に出て遊ぶことを嫌つたのは、人並外れて病弱な故でもあつたらうが、感受性の鋭かつた秋水のことであるから、一面には、父のない子としての悲しみがあつたのではなからうか。何時であつたか秋水は私に向つて、子供の時には父のない子としての悲哀を味はつたこともあると、しみ〴〵とした調子で云つたことがある。しかしそれに就いて、具體的に何も物語りはしなかつたから、唯だ徒らに想像を逞しくして見るに過ぎないが、何か心に受けた深い痛手があつたに相違ない。因みに秋水の父篤明がこの世を去つたのは、成長を疑はれて居た秋水の僅か二歳の時であつた。秋水自身の語る處に據るも、人から傳へ聞く處に據るも、笈を負ふて高知市に遊學してから後の秋水には、次第に一種の朗かさが加はつて居るが、まだ生まれ故郷にある日の幼ない秋水には、何處かじめ〴〵した陰氣な處のあるのを見ても、この推測は眞實に近いものではなからうか。

この病弱な幼少の日の秋水は、人知れぬ無邪氣な樂しみが一つ存してゐた。何んでも中村町に壽吉と云ふ人が住んで居たが、或る時、この人が秋水に馬の繪を描いて與れたことがある。ところが、それからは壽吉さんの姿さへ見れば、『壽吉さん、馬の繪を描いてつかせんや』と、待つて居たやうに、甘へた調子で必らず煩くせがむやうになつた。初めの中こそ壽吉さんも秋水の要求に應じて居たが、仕舞ひには根氣敗けのした壽吉さんの方で、幼ない秋水を避けるやうになつたと云はれて居る。しかし秋水にとつては、幾年經つてもこの壽吉さんと云ふ人と馬の繪とは、懷しい思ひ出の一つであつたやうである。

母からこの話しを聞いて幾日か經つてから、私は秋水に向つて覺えて居るか何うかと諮ねて見た。秋水は怪訝さうに私の顏を見詰めて居たが、私が再び同じ問ひを繰り返すと、今度は何んとも答へず唯だ輕く頷いて見せた。そして何時になく和やかな笑みを湛へながら、風鈴の鳴る夕暮れ近い緣側に坐つたまゝ、何時までも庭の彼方をぢつと眺めてゐた。後にも前にも、私はこの時ほど潤ひのある秋水の顏を見たことがなかつた。で、何にをそんなに微笑んで居るのかと訊いて見た。すると秋水は、返らぬ日の思ひ出の夢から醒めたやうに、壽吉さんと馬の繪のことだと簡

單に答へて、徐かに坐を立つて書齋に這入つて行つた。

壽吉さんの馬の繪から、幸德家では飛んでもない事件が起つた。或る日、秋水は壽吉さんの描いて呉れた馬の繪を手本にして、家寶の六曲屏風に怪しげな馬の繪を描いたさうである。そして餘りのことに驚く家人の騷ぎを餘所に、幼ない秋水は頗る得意であつたと云はれて居る。間もなくその屏風は經師屋に送られて、秋水の繪は洗ひ落されて了つたとのことであるが、何んとなく惜しいことをしたものだと思ふのは、唯だ單に私一人だけではなからう。尤も幼ない秋水の描いたその繪は、今でも好く注意して見ると、幻のやうに朦朧と消え殘つて居るさうであるが、私は遂にその屏風を見ずに過ごして了つた。そしてまた秋水の記憶も頗る怪しげで、そんなことがあつたかも知れない位のものであつたが、聞くだに微笑ましいこの無邪氣な惡戯は、何時も母が好んで茶話の一つにしてゐた。

今日秋水の書は世間で大分珍重されて居る容子であるが、秋水が繪を描くことを知つて居る人は少からうかと思ふ。後年になつてからも、何うかすると思ひ出したやうに繪を描いて居たが、別にそれを人に示さうともしなかつた。主として漫畫めいた人物ばかりであつたが、唯だ生來の

器用さ一方で描いて居るので、本格的に稽古した繪ではなかつた。しかし何處か棄て難い味があつた。父の篤明はその著『太平ひとつばなし』に、自分で筆を執つて挿圖を描いて居るが、兄の龜治も秋水に劣らぬ器用な人であつたから、定まつた師匠もなく道樂半分に花鳥畫を學んでゐた。そして龜治の子の幸衛は、ともかく人並の洋畫家になつて死んで居る。想ふに、この器用さは幸德家の遺傳であるかも知れない。秋水が繪を描く時は、餘程機嫌の好い退屈した時に限つて居たが、幼少の日から妙に繪が好きであつたと見えて、前述した馬の繪の他にも、繪に關する幾つかの逸話が殘つて居る。

秋水の幼な友達であつた安岡秀夫氏は、まだ十歳になるかならない秋水が、何時の間にか自分で作つた兎猿合戰の物語に、自分で素晴らしい挿繪までも描いて居るのを見て、秘かに強い嫉妬を覺えたと云つて居られる。私もまたその頃の秋水が、中村町から少し離れたところに鎭坐する八幡宮に、自分で描いて奉納した繪馬を見たことがある。繪馬と云つても、勿論それは然う大きなものではないが、西行法師が二人の子供に銀の猫を手渡して居る圖であつた。いづれ何にか粉本を見て描いたものであらうが、上手下手はとにかくとして、如何にも丹念に描いてあつたと記

憶して居る。若しかすると、この繪馬は今でもまだ殘つて居るかも知れない。それとも秋水の他の多くの遺品のやうに、亂暴にも燒却の刑に處せられて了つたであらうか。

想へば、私にそんな繪馬のあることを敎へたのも、私をわざ〳〵その八幡宮に案內して呉れたのも、餘人ではなく秋水その人であつた。私達は二臺の俥を連れて其處へ出掛けて行つたが、二人の車夫はいづれも秋水の幼な友達であつた。八幡宮は幾つも〳〵石段を登つた高い坂の上にあつたが、境內には鬱蒼たる老樹や若木が神々しく繁つてゐた。そして油蟬が身に降りかゝるやうに鳴いてゐた。秋水はあれこれと指差し示しながら、餘り廣くもない境內の事物を私に說明した後で、木の間を洩れる南國の眞夏の日光を避けやうともせず、幼少の日に自分で描いた繪馬を見上げながら、苦笑と共に何時までもぢつと眺め入つてゐた。私には如何にも感慨深げなその秋水の姿こそ、思ひ出のその愛すべき繪馬にも增して、生涯何うしても忘れることの出來ないものである。しかもそれから數年後に、人の知るあの恐怖の日が來たのである。やがて我に返つて私の方を振り向きながら、簡單に何うだと私の批評を求めた秋水は、何時もの秋水と何んの變りもなかつた。

秋水が文字を知つたのは幾つの時であつたのか、殘念ながら私には何うしても判然しないが、空覺えのいろ〳〵な話を綜合して見ると、何うやら四、五歲の頃ではなかつたかと思ふ。小學校に通ふ遙か以前から、確かに秋水は文字の智識をもつて居たやうである。しかし誰れが秋水に文字の手解きをしたのか、秋水を知り、秋水を追憶する者にとつて頗る興味あるこの問題も、恐らく最う永遠に解かれざる謎であらう。七歲になつた時、秋水も世間並に町の小學校に入學して居るが、或る意味から云つて、これが秋水には社會に接する最初であつたらう。學校に於ける秋水の成績は、缺席勝ちな病兒であつたにも關はらず、入學當初から拔群の優秀さを示した。そして進級制度が存在して居た時代のことゝて、試驗ごとに多くの朋輩を後目に掛けながら、秋水はとん〳〵拍子に進級して行つた。

秋水が兄の龜治に伴はれて、修明舍と云ふ私塾に通ふやうになつたのは、まだ町の小學校に在學中のことであつた。その塾は昔ながらの漢學塾であつたが、經營者である木戶先生は、附近では隨一の漢學者であつた。秋水はこの塾で最初に『孝經』の素讀を受けて居る。秋水の生まれたやうな土佐の田舍町では、まだ小學校に手習ひ机を持ち込んだ時代であるから、いろ〳〵な點で

寺小屋時代の遺風が殘つてゐた。で、然るべき師を求めて課外に漢籍の稽古をすることが、生徒間に競爭的に行はれて居たのである。母の話に據ると、兄の龜治もなか〳〵頭の好い子供であつたが、弟の秋水とは比較にならなかづたさうである。事實秋水は、此處でもまためき〳〵頭角を現はしたが、忽ちにして神童の名を稱へられるやうになつた。しかも秋水はその塾で最年少者の一人であつた。

秋水の幼少の日の恩師である木戸先生は、私にとつても生涯忘れることの出來ない人である。明治卅九年の夏、私は秋水に伴はれて初めて中村町に行つたが、その時、秋水の訪問に對する答禮の意味で、思ひ掛けなくも木戸先生の來訪を受けた。で、日頃母からその噂を聞いて居た先生に、私も直接拜顏の榮を得ることが出來たが、その時の先生は、何處か一徹さうな最う好い加減の老人であつた。二時間餘りのぼそ〳〵話しが終つて辭し去られる時、先生は玄關先で私に向つて、『今度は好いことで御目に懸かりませう』と、突然籔から棒に妙なことを云はれてから、老人らしく丁寧に最後の一禮をされた。秋水にはその意味が通じたのであらうか、それに應へるやうに、珍らしくも無造作に聲高く笑つてゐた。しかし私には、何んのことだか一向解らなかつた

まゝに、今猶謎の言葉として記憶の底に殘つて居るが、恐らく秋水の思想に關係ある言葉であつたらう。その日、何んでも先生から秋水に向つて、秋水の思想に對して意見めいた言葉があつたとのことである。

秋水は木戸先生の歸られた後で、自分の思想に對する先生の無理解さを呟くやうに語つてから、何時になく物寂しさうに欝ぎ込んでゐた。こんなことは秋水としては珍らしいことであるが、幼少の日の恩師であつたゞけに感傷的になつたのであらう。世間の壓迫には最う馴れては居たものゝ、まだ年の若かつた私は、何時までも欝ぎ込んで居る秋水の姿を見るに付け、自分の教へた昔の秀才を心から惜しむ先生と、時代から進み過ぎたが故に惜しまれる秋水と、いづれも理由ある二人の心情を推量して、胸の底から黑い凝塊の込み上がつて來るのを覺えた。そして止めどもなく熱い涙が頰を傳ひ出したので、私はひとり秘かに裏庭に出て心のまゝに啜り泣いたが、これが秋水と木戸先生との最後の會見であつた。

餘程經つてから、私の名を呼びながら母が私を探がしに來た。そして來客のあることを告げてから、何時にない私の容子に氣付いた母は、如何にも心配さうに、泣き濡れた私の顏をぢつと見

詰めて居たが、何にを思つたのか突然母は、『木戸先生は普通の年寄りぢやもの、わたしや傳次の味方ぢやけん！』と云つた。私は驚愕して思はず母の顏を仰ぎ見たが、七十歳に近いその母の中に潜む力強い何にものかゞ、ひし〳〵と身に迫つて來るのを感じた。母は私から眼を逸らして、稍暫らく無言のまゝ空の一隅を眺めて居たが、再び慈しみに充ちた眼で私の顏をぢつと見た。私は母に縋り付いて、聲を限りに泣きたいやうな氣持ちになつた。やがて母に伴はれて家に還入つて行くと、私の知らぬ間に訪づれて來た三四人の青年を相手に、先刻木戸先生を應對した同じ座敷で、秋水は如何にも愉快さうに談笑してゐた。

秋水が修明舍で悉にした神童の名は、やがて近鄕近在の人々の噂に上るやうになつた。母は秋水のこの好き評判を聞くに付けても、それを喜ぶと云ふよりも、却つて秋水の健康を心配したと云つてゐた。幼少の日の秋水は他の兄弟の誰れよりも、周圍の人々から寵愛されたさうであるが、世間から神童の名を謳はれ出してからは、幸德家を再興する爲めに生まれた神興の子として、いよ〳〵寵愛を一身に集めるやうになつたと云はれて居る。考へて見ると、早く父を亡くした小憫な末子である上に、人並外れて聰慧で、溫順で、何處か子供らしい愛嬌があつたと云ふの

だから、秋水ほど寵愛の條件を具備して居る子供は、世間でも然う〳〵澤山はなからうと思はれる。

伯父の勝右衛門は、まだ秋水がそこら邊りを這ひ廻つて居る頃から、この兒は後日に於いて必らず名をなすであらうと、口癖のやうに豫言めいたことを云つて居たさうである。伯父の豫言が的中したと云ふ譯でもなからうが、善惡は別として、秋水は名高い點に於いては何人にも退けを取らないであらう。何にはともあれ、伯父は秋水の兄の龜治を養嗣子にして居ながら、龜治よりも弟の秋水に特殊の愛情を寄せてゐた。秋水は極く幼なかつた頃、飯櫃入れの中に入つて、遊ぶことを好んだが、頑是ない小兒のことゝて、飛んでもないことをその中でして了ふことがあつた。しかし人並外れて潔癖な人であつたのに、何時も伯父は慈しみ深く笑つて見て居たさうである。若しそれが他の子供達のしでかした粗忽であつたら、餘り香ばしくないその飯櫃入れは、早速棄て去られて了つたであらうと云はれて居る。これを以つて見ても、この伯父が如何に幼ない秋水を愛して居たかゞ知れるが、聽く者には差して興味のないこの話しも、母が好んで口にした茶話の一つであつた。

可笑しなことには、何故か秋水はこの話しを酷く嫌つてゐた。で、何時も眉の間に氣難かしく皺を寄せながら、無心に語る母のその思ひ出を聞いて居たが、或る日、とう〳〵その話しに鋭く止めを刺して了つた。何時ものやうに母がその話しを始めた時、突然秋水は、飯櫃入れの中に小便をしたのは二三度であつたらう、最う幾百遍その話しを聞かされたか知れないから、今後はその話しだけは止めて下さいと、冗談めかしく母に向つて要求して掛かつた。勿論その言葉は優しくもあれば滑稽でさへあつたが、何處かに秋水特有の皮肉な鋭さがほの見えてゐた。で、母も大笑ひをしてその話しを中止して了つたが、それ以後、母はその話しを二度と再び口にしなくなつた。

餘談ながら、伯父勝右衛門に關連した妙な思ひ出がある。『日刊平民新聞』が發行停止を命ぜられて、平民社を解散してから間もなくのことであつた。秋水の保養かた〳〵家族一同土佐に歸省して、一年餘り中村町に蟄居したことがある。その時、谷川家に嫁いで居る次姉の牧子が、子供のない私達夫婦の無聊を慰めやうとして、何處からか、一匹の狆の仔をもらつて來て呉れた。ところが、その狆の名に就いて秋水に相談すると、秋水は小首を傾けて勝右衛門と云ふ名を選んだ

が、ふと氣付くと、それは日頃母から聞いて居る亡き伯父の名であつたから、私は呆つ氣に取られて秋水の顏をぢつと眺めた。すると秋水は、何にか仔細ありげに皮肉な笑みを浮べながら、何處までも勝右衛門と名附けろと主張して止まなかつた。しかし幾ら秋水の命だからと云つて、そんな失禮なことが出來やう筈がないから、私は獨斷でその狆にちやめと云ふ名を附けた。秋水もその名に滿足したやうであるが、それでもまだ思ひ出したやうに、勝右衛門と付ければ好いのにと云つてゐた。私には秋水が何故そんな失禮なことを考へたのか、そしてまた何時になく何故く〳〵と繰り返すのか、どうしても不思議でならなかつたが、數日經つてから、秋水に說明されて初めて合點することが出來た。

秋水の語る處に據ると、私達と同じ邸内で暮らして居る伯母の淺子が、若い頃から並外れた犬嫌ひであつた爲めに、幼少の日に秋水は愛犬と別れた思ひ出があつたが、それは幼ない秋水が心に受けた大きな痛手であつた。で、今度は伯母の虐待防止の爲めに、殊更らに伯父の名を選んだとのことであつた。因みに淺子は伯父勝右衛門の未亡人である。一族の中で最年長者であつたこの伯母は、誰れに對しても親切でもあれば慢しくもあつたが、小さなちやめに對してだけは、果た

して秋水の云ふやうに好感をもつて居なかつた。何うかして聞くちやめの悲鳴の背後には、大抵この伯母が箒を手にして立つてゐた。それにしても、秋水は隨分念の入つた惡戯を考へたものだと、今でも時々思ひ出して可笑しくなることがある。それよりも愉快なのは、私の告げ口に依つてそのことが母に洩れた時、母から叱られて居る秋水の恰好であつた。眞赤になつて頭を搔きながら恐縮して居る圖は、家庭生活に於ける秋水の傑作の一つであつた。

傍徑に這入るやうであるが、家庭に於ける秋水に就いて少しく述べて見やう。秋水は性格的に人よりは無口であつたから、家庭に於いても冗談などは滅多に云ひはしなかつた。たとへ冗談めかしいことを云つても、何處か針で差すやうな鋭いところがあつた。何時もにやりと皮肉な微笑みを浮べはするがなか〳〵容易に大聲では笑はなかつた。或る人は演壇に立つた秋水を批評して、寒月に向つて狼の吼えるやうだと云つて居るが、もとよりそんな凄さはなかつたとしても、家庭生活の何處かにも然うした面影があつた。母の思ひ出に容赦なく止どめを刺したり、幼時の思ひ出から失禮な犬の名を考へ出したりする秋水に、何人も上述のやうな要素を見出すであらう。それよりも、家族の者の粗相や失策を發見した時、口叱言一つ云はずに、唯だにやりと皮肉

な笑みを鋭く洩らす秋水には、確かに何處か凄さに似たものがあつた。しかし別に癇癖があるではなく、家族の者に對してば、他人の想像して居るより遙かに親切で優しかつたから、秋水の性格が重荷になるやうなことは少しもなかつた。大人ばかりの生活であつたから、子供のある家のやうな朗らかさはなかつたにしても、家の中は何時も穩やかで明るかつた。

幼少の日の秋水が神童の名を稱へられたのは、幸德家の血を受け嗣いで居るからと云ふよりは、寧ろ母方の小野家の血を引いて居るからであつたと思はれる。母の話しに據ると、小野家では麒麟兒が時として現はれるとのことであるが、現に秋水と前後として、一人の然うした麒麟兒のあつたことを聞いて居る。今ではその子供の名は忘れて了つたが、秋水の從弟であることだけは記憶して居る。即ち熊本の縣令であつた安岡良亮氏の妹と、秋水の母の弟との間に生まれた子供である。何んでもその子供は小學校へも行かぬ以前に、すでにあの大部の『和漢三才圖會』を全部通讀して、しかも好く諳記して居たとさへ傳へられて居るから、大抵の人は聞いたゞけでも舌を捲いて了ふであらう。愉快なことは、その子供は僅か五歲の時に自分から親に願つて、無理に學校へ入學許可の手續を取つて貰つたが、一ヶ月と經たない中に、今度はまた自分から小學校に

愛想を盡かして了つたさうである。しかし惜しいことには、たぐひ稀れなその麒麟兒は夭折したと云ふことである。

木戸先生の修明舍に、秋水の競爭相手が唯だ一人だけあつた。それは後になつて、『時事新報』の名編輯長として、また重役として、この國の新聞界に知られた安岡秀夫氏であるが、安岡氏も幼少の日に神童の名を恣にした人である。前に述べたやうに、この安岡氏もまた小野家に關係ある人であるから、不思議と云へばまことに不思議なことである。數多い他の同輩とは比較にならない程、秋水も安岡氏も智識的には秀絶して居たが身體だけは共に病弱で小さかつたさうである。しかし自分よりも大きな身體をした年上の同輩を、何時も自由に頤使して居たと云ふのだから、子供仲間に於ける二人の名望を知るべきである。

安岡氏の父君である安岡良亮氏は、維新の勤王家であり、熊本の縣令として世に時めいた人であるが、明治九年に神風連の暴動が起つた日に、安岡縣令が暗殺されたことは餘りに有名な話しである。秋水は熊本に於ける安岡良亮氏の暗殺の報が、中村町に傳へられた時のことを記憶してゐた。何んでも親類中が往つたり來たりして大騒ぎをして居たが、母や伯母がひそ〳〵と話しな

がら泣いて居たので、理由もなく自分も悲しかつたと云つてゐた。しかし漠然ながら人々の騒ぐ原因を知つてからは、何故そんな偉い人が殺されねばならないかと云ふことが、何時までも疑問として殘つたとも云つてゐた。後年になつて、テロリズムの鼓吹者のやうに考へられた秋水のことだけに、これはまた頗る興味あることではなからうか。安岡秀夫氏が父君の鄕里である中村町の人となつたのは、父君が不慮の死を遂げられてから後のことであるが、今度親類の賢い子供が町に歸つて來るからと、秋水は母から豫告されたさうである。

安岡氏の語られるところに據ると、安岡氏は秋水よりも一つ年下であつたが、その年齡の差の爲めであらうか、木戸先生の塾に於いて、何にどとも秋水が一番で安岡氏が二番であつた。幼少の日の安岡氏は、秋水を競爭相手に選んで努力されたさうであるが、何んなに努力しても、秋水の上に出ることが出來なかつたばかりでなく、秋水のやることなすことが餘り獨創的だつたので、仕舞ひには斷念め氣味になつたと云つて居られた。或る日、安岡氏は苦笑する秋水を前に置いて、嫁いでからまだ間のない私に向つて、子供の時から、秋水には何時も一歩先を越されて居たが吉原遊びの手解きをして呉れたのも、誰れあらうこの家の主人公であると、飛んだ素破抜き

をされたことがあつた。

しかし幼少の日の秋水が、何の程度まで安岡氏を競爭相手にして居たか、その點は頗る疑問とする處である。秋水は唯だ安岡氏の成績が優秀であつたことを、何時であつたか簡單に話したばかりで、その他には別に何にごとも語りはしなかつた。そしてその口吻から推すと、秋水としては安岡氏が考へて居られるほどには、最初から然う競爭意識などはなかつたやうである。それに自分の子供最負の母などは、幼少の日の安岡氏の穎才を認めながらも、あたかも格段の相違でもあるかのやうに、秋水と比較して見やうともしなかつた。ともあれ、何時も一番であり二番であつたと云ふ、秋水と安岡氏との斯うした宿命的な關係は、後に笈を負ふて高知市に遊學してからも、其處での新しい同輩を後目に掛けて、依然として續けられたと云ふことである。

秋水が自作の兎猿合戰の物語に、自分で丹念に挿繪まで描いたのは、木戸先生の塾に通つて居るこの時代のことである。これは最後まで母の自慢の種であつたが、幼ない秋水にかかる自作の物語のあつたことは、秋水の死後安岡氏に依つても世に傳へられて居る。或る意味から云つて、恐らくこれが秋水の最初の著作ではなかつたらうか。私はその內容に就いては知るところがない

が、それが子供らしい夢を盛つた童話であることは、母の話しなどに據つて大體想像することが出來る。若しかするとその最初の著作は、搖籃の中から浸り續けたお伽噺しの世界に、秋水自身が建てた墓標であつたかも知れない。何故なら、智識的に餘りにも早熟であつた秋水が、僅かな月日を於いて次に示したものは、最早や無邪氣な子供の世界のそれではなく、すでに大人の世界に足を踏み入れて居るからである。

兎猿合戰の物語を書いたのは、十歳前後のことであつたと推定されるが、それから間もなく、秋水は自分だけの新聞紙を拵へて樂しんで居る。秋水の生まれたやうな土佐の田舍町では、大人でも極く少數の智識階級の人でない限りは、まだ新聞紙の何にものなるやを知らない時代であるから、これは幼ない秋水の足跡の中でも特筆すべきことであらう。新聞紙と云つても、半紙か何にかに毛筆で丹念に書いたもので、活字にされたものでなかつたことは勿論である。しかし安岡秀夫氏の話しに據ると、社說もあれば、政治記事も、社會記事も載せられて居て、後年の安岡氏が專問的な眼で見ても、立派な新聞紙の體をなして居たと云ふことである。愉快なのは、その社會記事で——當時の言葉で云ふと三面記事であるが、何月何日何處の誰れの家で犬の仔が何匹生

されたと云ふやうな、如何にも子供らしいが頗る要領を得たものであつた。そしてその社説なるものに至つては、これはまた子供が書いたとは思はれない程、理論整然たるものであつたと云はれて居る。

前述のやうに、秋水は十歳前後を境として、智識的に早くも大人の世界に足を踏み入れて居るが、秋水が政治問題に興味を持ち出したのも、やはりこの時代からのことであつた。幼ない秋水の心を動かしたのは、自由民權の旆旗を翳す自由黨の思想であつたが、人の知るやうに當時自由黨の思想は最も進歩した政治思想であつた。秋水は自分の小さな新聞紙に社説を書いて、政治に關する自分の意見を堂々と述べて居たさうである。いづれ自由黨の機關紙や書物からの受賣りであらうが、それにしても、十歳を一つか二つ越えたばかりの子供であるから、早熟とは云へ餘りにも早熟過ぎはしないであらうか。堺利彦氏が云はれて居るやうに、秋水が自由黨の最左翼から社會運動に入つて行つたとすれば、生命まで投げ出した秋水の思想の根源は、早くもこの幼少の日に芽生えたものと云はねばならない。

この愛すべき小さな政治家は、唯だ單にひとり好がりの筆先や口先ばかりではなく、早くも後

日の秋水を想はすやうな、小さな運動さへも起して居たのである。後日『ラサール傳』を著はして、ラサールの思想即行動の情熱を讃へた秋水は、こんな幼少の日から、思想と行動は不可分のものとして考へて居たのであらう。事實秋水は、その生涯を通じて思想に反して行動することが出來なかつた。後年になつて、中江兆民先生の慰撫をも聞かず『中央新聞』を辭し去つたのも、非戰論を稱へて他の同志と共に『萬朝報』を立ち去つたのも、祿を食む日に於ても猶、主義信條を曲げることが出來ない秋水の强さを示すものである。若しそれ社會運動に身を投じてからの秋水が、積極的な思想即行動の人間であつたことは、世間周知の事實であるから斷るまでもなからう。

中村町と云ふ土地は、自由黨の發生地である土佐國にありながら、自由黨の地盤ではなく、改進黨の勢力範圍であつたとのことであるが、自由黨の同志を以つて自から許す幼ない秋水には、このことが餘程不滿であつたものゝやうである。で、改進黨の集會が町で行はれる時など、何時も多くの子供仲間を寄せ集めては、盛んに示威運動を起したと云ふことである。秋水の指揮する子供の一隊は、自由黨と書いた幾本かの紙の旗を押し立てゝ、會場近くで聲を限りに自由黨萬歳

を呼んでは、集まる大人達の度膽を抜いたさうである。若しそれが大人の仕業であつたなら、兩黨の爭ひが猛烈な當時のことであつたから、即坐に手足の一本位は折られて了つたであらう。しかし血相を變へて飛び出した壯士の面々も、相手が思ひ掛けない子供達のことであるから、唯だ苦笑して引き退がるより他はなかつたとのことである。

その成長をさへ懸念されて居た病弱な秋水が、たま〳〵戸外に出て遊ぶと、こんな餓鬼大將になつて居たのだから愉快である。それも子供らしい戰爭ごつこなどとは違つて、子供ながらも一廉の理論的な根據に立つて、政治的に大人達を相手にして居たのであるから、子供の惡戯としては念の入り過ぎた惡戯であると云へやう。しかも秋水よりも遙か年上の十五六歳の子供達までが、唯々として秋水の指揮に從つたと云はれて居る。この興味ある小さな示威運動は、參加者の一人であつた安岡秀夫氏の話しに據ると、主唱者であり指揮者である秋水を除げた他の者には、自分達が何にをして居るのか好く解らなかつたと云ふのだから、尙更ら以つて愉快なことであると云はねばならない。

晩年になつて、生理的に飲めなくなつて了ふまでは、秋水も或る程度まで酒を嗜んだものであ

るが、秋水の生活に酒が始めて登場したのもこの頃である。しかも僅か十一歳の秋水が、念入りにも酒に依る最初の失敗を演じて居る。母の話しに據ると、何んでも氏神樣の秋祭りの日に、家からの御供物を持つて參拜した秋水は、心ない大人達の酒宴の席に引張り込まれて、亂暴にもしたゝか酒を飲まされたさうである。そして前後不覺に醉ひ潰れて家に送られて來たが、その爲めに、一時恢復の兆を見せて居た秋水の病は、急激に變調を來たしたばかりではなく、遂に宿痾となつて生涯苦しむやうになつた。後年になつても、母は秋水の健康の優れない時には、必らずこの出來事を思ひ出して、當時の大人達の誰れ彼れの名を擧げながら憤慨してゐた。しかし秋水は私の問ひに對して、多くの同輩の中から自分だけが選ばれて、大人の待遇をされたのが嬉しくてならなかつたのだと、當時を回顧して朗かに苦笑してゐた。

斯うして幼年期を終る頃には、木戸先生の修明舍で一通りの漢學の智識を得て居たが、初めて秋水が漢詩を作つたのもこの時代のことである。しかし秋水に云はすと、それは平仄さへも忘れ勝ちなものであつた。この國に於ける自由民權の運動が白熱化して來ると共に、秋水の政治熱はいよ〳〵旺盛になるばかりであつた。板垣退助伯を始めとして、同國の諸先輩に對する限りない

恩慕の外に、この頃、河野廣中氏に對して特別の尊敬を寄せて居たやうである。何時であつたか秋水は私に向つて、子供の時には、河野廣中と云ふ人は何んなに偉い人かと思つて居たと、何時になく懐舊的な面ちでしんみりと話したことがあるが、その時には、すでに世の政治家の表裏を知り盡して、社會運動に一歩足を踏み入れてゐた。

秋水が生まれ故郷の中村町に母を殘して、唯だひとり笈を負ふて高知市に遊學したのは、近郷近在に普く神童の名を稱へられた、以上のやうな幼年期が過ぎると同時のことであつたが、それは秋水の十三歳の時のことであつた。

（追記、秋水の手記に依ると、秋水が木戸先生の教を受けたのは、高知市に於いてのやうであるが、私は秋水の周圍の人々から本文のやうに聞かされて居る。秋水に記憶の誤りがあらう筈はないが、周圍の人々の話しも、必ずしも誤りだとは云へないと思ふから、周圍の人々から傳へ聞いたまゝを記した。）

齋藤綠雨氏の思ひ出

返らぬ日の懐しい夢である思ひ出は、ひとり秘かに樂しむものであるかも知れない。況して私のやうな者が、齋藤綠雨氏に就いて知つたかぶりをすることは、烏滸がましさも程度を越して居るであらう。しかし、長い生涯の數々の思ひ出の中には、このまま墓穴の彼方へ運び去つて了ふには、餘りにも惜しいやうな氣のするものも幾つかある。綠雨氏に關する思ひ出もその一つである。とは云へ、私は綠雨氏に就いて殆んど何にも知らないのであるから、唯だ綠雨氏と交はりのあつた幸德秋水の妻として、綠雨氏と秋水の交友の一端を語り得るに過ぎない。しかも七十歳を過ぎた今日では、すでに私の記憶も衰へ果てゝ了つて居るから、僅かに逸話の幾つかを統一もなくあれこれと書き記すに過ぎない。

私は幸德家に嫁ぐ以前から、新聞や雜誌で鋭い皮肉を連發する正直正太夫が、幼少の日からその名を聞いて居た假名垣魯文の弟子であり、實は齋藤綠雨氏であることを世間並に知つてゐた。

そして娘時代から、解らないながらも綠雨氏の書くものを好んで讀んでゐた。知人から借りて貪るやうに『油地獄』を讀んだのも、今では五十年餘りも昔の懷しい思ひ出の一つである。しかし一面には、綠雨氏に就いての批評や惡罵も知つてゐた。高山樗牛氏が『太陽』誌上で『綠雨は果たして帮間なるか』と云はれたのを見た時は、綠雨氏とはそんな人かと思つたこともある。私が綠雨氏の容姿に接したのは、幸德家の人となつてから後のことであるが、まさか自分が綠雨氏と親しく口を利かうとは、結婚後まで夢にも思はなかつたことである。

人の知るやうに、齋藤綠雨氏は幸德秋水の親しい友の一人であつた。秋水の言葉を以つて云ふと、爾汝の交はりを最後まで續けた間柄である。綠雨氏と秋水との交友が何うして始まつたのか、それに就いて私は何にも知るところがないが、秋水の話しに據ると、秋水が綠雨氏と親しくなつたのは、獨身時代の終りである明治三十一年頃のことである。して見ると、綠雨氏が秋水と共に、『萬朝報』の記者をして居られた頃のことであらう。今日では『萬朝報』の名は完全に忘れられて居るが、當時の『萬朝報』は都下第一の發行部數を示した新聞紙であつた。私が幸德家に嫁いだのは明治三十二年の七月のことであるが、すでにその時あんなに親しかつたのを見る

と、僅かの間に二人の友交は急速な勢ひで深められたものと思ふ。實際秋水と綠雨氏との交りは、その當時から、他人の想像して居るよりは遙かに親しいものであつた。因みに年齢の上から云ふと、秋水の方が確か四つか五つ年下であつた。

秋水の朋友知人の中でも、綠雨氏は秋水の母に最も人氣のあつた人である。母は綠雨氏の來訪を心から歡迎したばかりではなく、『齋藤さん、齋藤さん』と蔭でも好く噂してゐた。秋水の知己には齋藤姓を名乘る人が幾人もあつたので、私は最初母のしば〳〵口にする齋藤さんなる人が、誰れのことであるのか見當が付かなかつたが、間もなく、それが正直正太夫であり綠雨氏であることを知つた。それにしても、何故母が秋水の數ある朋友知人の中で、特に綠雨氏をあんなにも好んで居たのであらうか。想ふに、世情に通じた綠雨氏が並外れて親切な人であり、江戸ッ子らしく何處かきび〳〵した處のあるのが、ひどく母の氣に入つて居たのであらう。事實秋水の留守の時など、田舍出の年老いた母を相手に世間話をされるのは、綠雨氏だけであつたやうに記憶して居る。

結婚後幾日か經つてから、私は秋水に呼ばれて書齋に這入つて行くと、秋水は笑ひながら私に

一通の手紙を差し出した。それは私達の結婚に對する齋藤綠雨氏の祝辭であつた。綠雨氏の名を聞いて、私は何故か不思議な胸騷ぎを覺えたが、それは私が綠雨氏の愛讀者であつた爲めであらう。見ると、餘り類のない恐しく肩下がりの文字で、美麗に書かれた五六行の短い手紙であつたが、『妻は茶漬なり、永久ならんことを要す』とあつたのを、今でも猶はつきりと記憶して居る。正直に云ふと、結婚したばかりの私には、『妻は茶漬なり』の意味が好く解らなかつた。で、秋水に質問して見たが、唯だにやりと皮肉な微笑みを投げ掛けられたばかりで、別に何等の解答も與へては呉れなかつた。

それから幾日か過ぎてから、綠雨氏は手紙で祝辭の返却を申し込んで來られた。何んでも二三文句が氣に入らないから、書き改めないと氣になつて仕方がないとのことであつた。私は秋水からそのことを傳へ聞いた時、餘りにも奇想天涯なので呆つ氣に取られて了つた。そして日頃から聞いて居たやうに、文士とは隨分變つた處のあるものだと思つたが、このやうに周圍の人々が何んとなく奇嬌なので、昔氣質の國學者の家に育つた私は、何んだか自分が島流しにでもあつたやうな心細さを覺えた。しかし秋水は、『綠雨らしいぢやあないか』と云つて、別に氣に止める容

子もなくにや〳〵と笑つてゐた。そして文章に對する綠雨氏の苦心や、それに關連した幾つかの逸話を物語つて呉れたが、殘念ながら、今では總て皆な私の記憶から消え失せて居る。私は問題の祝辭が返却されたか何うか知らないが、綠雨氏から書き改められた祝辭なるものが、遂に來なかつたことだけは確かである。

最近になつて氣付いたことであるが、綠雨氏の隨筆『長者短者』の中に『某君の新婚を祝ぎたるわが先年の大々蕪辭を、左に採錄すと前書をして、『妻は茶漬也、全きを之に求むるは夫の非道也。夫をして飢えざらしめば妻の勤務は畢れる也。△△君、味淋鰹節は一時のみ、茶漬は永久也、予は君が新なる妻女をも、茶漬以外に置く能はず、隨つて永久に必要なるべきを信ず。』とあるのが、私達の受け取つた祝辭に頗る類似して居るから、恐らくこれが遂に最後まで來なかつた、あの書き改められた祝辭ではなからうか。私は秋水の死後三十年以上も經つてから、計らずも綠雨氏の著書の中にこれを發見して、滲み出る熱い泪が頰を傳ふのを覺えた。

餘談ながら、能筆家揃ひの秋水の知己の中で、恐ろしく癖のある字を書く人が二人あつた。一人は題目のやうな字を書く伊藤銀月氏であるが、今一人は肩下がりの字を書く齋藤綠雨氏であ

る。何時であつたか母は、秋水が綠雨氏から來た長い手紙を讀んで居る時、綠雨氏の文字を模樣のやうに美麗だと批評したことがある。その時、『模樣のやうに美麗とは好かつた』と、秋水は私の顏を見て愉快さうに笑つてゐた。ところが、それから十日餘り經つて綠雨氏が來訪された時。無遠慮な秋水に依つて、早速母の批評が綠雨氏に傳へられると、さすがの皮肉家の綠雨氏も眞赤になつて、『これは參つた！　見事に急所をやられた！』と、頻りに繰り返し云つて居られた。そしてついぞ笑ひ聲を出したことのない綠雨氏も、この時ばかりは腹を抱へて笑ひ續けられたが、小學校時代から、如何に字が下手であつたかを說明された。それに據ると、國語や漢文や數學は人に敗けを取らなかつたが、習字と圖畫だけは並外れて下手であつたとのことである。尤も綠雨氏自身が云はれる如く、あの癖のある綠雨氏の字が果して下手な字であるか何うかは、私には全然判らないし、それに對する秋水の批評も聞いたことがない。

私が綠雨氏に初めて會つたのは、突拍子もない祝辭返却の申し込みがあつてから、かれこれ二十日ばかりも經つてからである。如何にも神經質さうな痩せ削けた綠雨氏の顏は、私に香川景樹の肖像を連想せしめたことを記憶して居る。と云つて、綠雨氏が香川景樹に似て居るとは思はな

い。綠雨氏が餘り痩せ削けて居られたので、子供の時、父の書齋で見たことのある香川景樹の肖像を、思ふともなくふと連想したまでに過ぎない。しかしそのことを秋水に話すと、秋水は顏の長い點は似て居るかも知れぬと云つて、なにか意味ありげに笑つて居たが、私の問ひに答へた秋水の話しでは、何んでも或る藝者が綠雨氏を批評して、お背もお高いがお顏もお長いと云つたとのことである。

綠雨氏の眼は然う鋭くはないが、見たところ誰れの眼よりも大きかつた。初對面の日に、私はその大きな眼で、しかも上目使ひでじろと一瞥された時、自分の腹の底まで見透かされて了つたやうで、思はず恐怖に似た不氣味な感に打たれた。これは辛辣な皮肉家としての綠雨氏が、先入主となつて居た爲めであつたかも知れない。しかしそんなことを取り去つて見ても、最初の印象では綠雨氏には何處か容易に近付き難いところがあつたが、二三度逢つて居る中には、何時とはなくそれ程にも思はなくなつた。そして親しくなるに從つて、綠雨氏の皮肉の槍玉に擧がつたこともあるが、その爲めに心を疵づけられたとも覺えない。

いづれも一癖ありさうな綠雨氏と秋水とが、一室に閉ぢ籠つて話しをして居る容子を見ると、

知らない人には、なにか重大な秘密の會合でも行つて居るやうに思はれるが、その實、二人は案外無駄話しに耽つて居たのである。唯だ二人とも低聲で餘り笑はないのだから、如何にもしかつめらしい感じがするだけで、吉原だとか根津だとか、顏の赤くなるやうな話しを洩れ聞くこともあつた。と云つて、無駄話しばかりをして居るのでもなかつた。別に聞き耳を立てゝ居たのでもないが、綠雨氏は何時も必らず定まつたやうに、いろ／＼な人を冷罵し冷笑されてゐた。そして秋水も敗けず劣らずそれに相槌を打つてゐた。時には二人で眞面目に憤慨して居ることもあつた。肺を病んで居られた綠雨氏の來訪のある度毎に、何んとなく氣になつたのは、綠雨氏のあの輕い空虛な咳であつたが、それは年と共に次第にひどくなつて行つた。

こんなことを發表して善いのか惡いのか判らないが、私は綠雨氏の身上に就いて不可解な謎を抱いて居る。結婚してから間もなくのことであるが、秋水は私に向つて、綠雨氏が某大名の落胤であることを告げたことがある。そして綠雨氏が世の中を白眼視されるのも、當然受くべき學校教育を令弟に讓られたのも、總て皆なその爲めであると云つてゐた。貧てはその大名の名を記憶して居たが、何時の程にか忘れて了つたと見えて、今では何うしても思ひ出すことが出來ない。

ところが、最近になつて、たま／＼綠雨氏の經歷を書いたものを見ると、それに記されて居る綠雨氏の父君なる人は、秋水の云ふやうな嚴めしい大名ではなかつた。念の爲めに、私は綠雨氏に關する二三の文書を覗いて見たが、いづれも同じ人の名が記されてゐた。即ち藤堂侯の侍醫であつた齋藤利光と云ふ人である。して見ると、秋水は私を欺むいたのであらうか。

しかし他のことでも、餘り冗談などを云つたことのない秋水が、況して親友の一身上に就いて、無責任な冗談を云つたとは信じられない。秋水を知つて居る人なら、誰れでも私のこの確信を諾つて呉れるであらう。それにあの並外れて無口な秋水が、そんなことを云つたのも不思議の一つである。そしてまた、私の聞き誤りでも記憶違ひでもないことは、何にものに誓つても斷言することが出來る。私は秋水の口から一度ならず二度三度までも、同じことを聞いて居る。で、私は綠雨氏の在世中から、綠雨氏を御落胤として封建的な敬意を表してゐた。僅かな金の工面に、しば／＼平民社へ來られた晩年の綠雨氏の姿に、そんな意味から、心の中で秘かに同情の涙を流したことさへある。想ふに、秋水自身が聞き違ひをして居たのか、それとも友人の間に然うした風評があつたのか、更らにまた、綠雨氏に然うした秘密があつたのを、秋水に向つて打ち明

けられたのであらうか。いづれにせよ、私には解くことの出來ない謎であるが、何處かにこの謎の鍵を持つて居る人が、今でも存在して居るのではなからうか。誤解のないやうに云つて置くが、私は何にも奇を好んでこんなことを云ふのではない。曾て秋水から傳へ聞いたまゝを、唯だ事のついでに正直に述べて置くまでゝある。

綠雨氏は時間を無視した長尻の人であつたが、何んなに多忙な時でも、秋水はそれを不愉快がりはしなかつた。そしてその長い對談に、唯だの一度として退屈した客子さへもなかつた。秋水には人の知らない奇妙な癖があつて、來客が不快な時や話しに退屈じた時には、紙縒で犬を造つて机の上に並べるのであつた。で、その犬の有無や數に據つて、大體秋水の氣持ちや客の性質を知ることが出來たが、人に依つては、一度に五六匹の犬を見受けることがあつた。しかし綠雨氏の場合には、何時の日も一匹の犬も見受けなかつたばかりではなく、何時も歸りには、秋水の方から送つて行くほどであつた。そしてそのまゝ送り狼になつて了ふことさへあつた。

少し女らしくない話しであるが、これも返らぬ日の思ひ出の一つであるから、遠慮なく述べることにしよう。或る日、晝過ぎから夜更けまで話し込んで居られた綠雨氏を、何時ものやうに送

つて行かうとする秋水が、門前で不作法にも用達しを始め出した。すると綠雨氏は、門まで見送つて出た私に向つて、突然『奥さん』と聲を掛けられてから、『傳さんが小便するや秋の月』と一句を吐かれた。そして自分から珍らしくも大聲で笑ひ出されたが、秋水もまたそれに乘じて朗かに笑つてゐた。やがて『お寢みなさい』と云はれたかと思ふと、秋水と共にすた〳〵と立ち去つて行かれた。私は門前に佇んだ儘、月光の中に消えて行く二人の姿を見送つたが、それは忘れもしない名月の夜のことであつた。因みに綠雨氏が『傳さん』と云はれたのは、秋水の名が傳次郎であつたからである。

秋水は稀れに見るほど入浴嫌ひな人間であつたが、その反對に綠雨氏は入浴好きの江戸つ子であつた。『二錢乃至二錢五厘の湯錢を以つても、人は快を取ることを得る者也』と、例の皮肉な調子で、綠雨氏は何にかに書かれて居たやうに記憶するが、この話しの當時は、まだ湯錢は僅かに一錢三厘であつた。可笑しなことには、入浴嫌ひな秋水が入浴好きな綠雨氏を訪問すると、必らず一錢三厘の愉快を味はつて來るのであつた。そんなことから、私は秋水が餘り入浴しない時など、それとなく綠雨氏訪問を勸めたものであるが、私の嫁ぐ以前には、母もその手を用ゐて居

たとのことである。秋水はそれを知つてか知らないでか、大抵の場合、とにかく綠雨氏を訪問して垢を落して來た。その都度、私と母は顏を見合せて人の惡い笑みを浮べたものである。ところが、秋水と綠雨氏との入浴は、必らずしも一錢三厘の錢湯に限つて居るのではなく、時には馴染みの酒樓の風呂であることを、一杯機嫌の時に私水自身が暴露して、私と母を見事にべこましたことがある。

何時であつたか、綠雨氏は仕立下ろしの黑羽二重の五つ紋付の上下に、同じく下ろし立ての仙臺平の袴と云ふ、見るからに堂々たる服裝で訪れられたことがある。そして斯う身體が惡くて、は何時死ぬか判らないから、後世に恥を遺さないやうに、人並の姿をした寫眞の一枚位あつても好からうと思つて、今日寫眞をとつて來たと云つて居られた。その時、寫眞をとるだけでそんなに服裝を整へたのかと、秋水が例の調子で無遠慮な質問を發すると、笑ひながら然うだと簡單に答へられてゐた。その日は私に向つて、『奧さん、今日は殿樣のやうでせう』などと、立つたまゝ袖口を揃へて反り身になられたりした。そして何時にたく盛んに、はしやいで居られたが、氣の故か何處か寂しさうにも見受けられた。こんなことは後にも前にも唯だ一度だけで、何時もの

綠雨氏とは人違ひがしてゐた。秋水もまた何にか變つたことがあつたなと、私の注意を促すやうにそつと囁いたが、遂に何にがあつたのか知ることが出來なかつた。それから間もなく、綠雨氏から所謂、後世に遺すべき一葉の寫眞が屆いたが、それは堂々たる紋付き姿の半身像であつた。

秋水は綠雨氏を批評して、人は好く綠雨氏のことを片意地でひねくれ者のやうに云ふが、それにまた、綠雨氏も人を攻擊したり憎んだり交際を斷つたりされるが、その實、稀れに見るほどの善良な人だと云つてゐた。そして綠雨氏の誠實で且つ親切であることを、幾つもの例を擧げて話したことがあるが、それに就いて私には面白い――と云つては失禮かも知れないが一つの思ひ出がある。何時であつたか、綠雨氏に纏まつた金が這入つたことがある。その時、秋水に向つて少し置いて行かうかと云はれたが、それを云ひ出されるまでに、さも云ひ憎さうに幾時間も躊躇された後、惡いことでも云ふやうに顏を赤らめながら、やつとの思ひで云ひ出されたさうである。後になつて秋水は私に向つて、なにをもち〳〵して居るのか判らなかつたが、綠雨氏がそれほどな人間とは知らなかつたと、この新たなる發見に心から一驚してゐた。

一部の人々からは、げち〳〵亡者のやうに云はれた綠雨氏にも、子供のやうに無邪氣な一面が

あつた。或る時、秋水と共に龜戸の天神様に出掛けられたことがあるが、何んでも池の鯉に麩をやられるのに、惜げもなく一つまた一つと、六十五錢分とかをやられたさうである。そしてそれが別に街つて居るのではなく、大きな鯉がぬつと姿を現はした時などは、手を叩かんばかりに喜んで居られたと云ふことである。いづれ秋水も鹿爪らしい顏をして、仕方なしにその仲間入りをしたことであらうと思ふ。しかし今日この頃の六十五錢なら、何にも取り立てゝ云ふ程のことでもないが、當時の金にして見ると、隨分た量の麩を投げ與へたことになるから、定めし池の鯉も滿腹したことであらう。私はこの話しを秋水から聞いた時、世の中を白眼視して辛辣な皮肉を吐かれる綠雨氏よりも、これが綠雨氏の眞の姿ではないかと思つたが、時の經つに從つてます〳〵この感が强くなつて來る。若し探し求めるならば、無邪氣さなどは爪の垢ほどもないやうに思はれて居る綠雨氏には、人の知らない斯うした逸話が案外多いのではなからうか。

これに類似した話しが今一つある。何時であつたか、秋水と綠雨氏とが何處かへ出掛ける時、二人の俥がお祭り騷ぎの街に差し掛かると、前の俥に乘つて居られた綠雨氏は、突然馬鹿囃しの屋臺の前で俥を止めて下りて了はれた。そして折りからの馬鹿囃しに興じられたが、江戸つ子な

らぬ秋水に、馬鹿囃しの面白さなどが解らう筈はなかつた。で、目的地に急ぐべく幾度か綠雨氏を促したが、綠雨氏は最う暫らく、と答へられるばかりで、二時間餘りも秋水を無聊に苦しめられたさうである。私はこのことを狄水から聞いた時、知らない土地の馬鹿囃しの屋臺の前に立つ、背の高い綠雨氏と背の低い秋水の姿を思ひ浮べて、何んとも云ひやうのない可笑しさに捉はれた。それにしても、秋水が好く辛抱して見て居たものだと、今でも時々ふと思ひ出して、我ともなく忍び笑ひを洩らすことがある。聞くだに微笑ましい上述の二つの逸話は、綠雨氏が亡くなられた時、綠雨氏に關する記事を取りに來られた伊藤銀月氏に、秋水自身が笑ひながら話して居たやうであるから、同氏に依つて何かに發表されて居るかも知れない。

足繁く來訪されて居た綠雨氏が、何時からともなくぱつたりと來られなくなつた。私は何故然うなつたのか知らないが、別に秋水と爭ひごとがあつたとも思はれない。綠雨氏からは頻繁に便りだけはあつたやうである。そしてまた、二人は何處かで逢つて居たやうにも推測されるが、想ふに、これは綠雨氏が轉地療養の爲めに東京を去られたからではなからうか。何にはともあれ、然うした狀態が一、二年餘りも續いたであらう。その間に、私達は山の手を二、三ケ所移轉して

廻つたが、最後に本郷の根津に引越した時、秋水から出した移轉通知の返事に『古戰場』云々の文字があつたことを覺えて居る。甚だ迂濶な話しではあるが、私は綠雨氏の『古戰場』が何にを意味するのか知らなかつた。秋水に話して居られる來客の冗談口から、それが根津の遊廓を意味することを知つたのは、根津の住居を引き拂つてから後のことである。若し私の記憶に誤りがないとすれば、綠雨氏が病氣保養に相模の小田原へ行かれたのは、この頃のことではなかつたかと思ふ。

綠雨氏は一年餘りも小田原に行つて居られたやうであるが、餘程退屈であつたと見えて、殆んど毎日のやうに手紙を寄せられてゐた。それらの手紙の中には、『四面蕎麥の引越し沙汰』と云ふ名文句や、『町の名の十字にてもよろしく』云々と、一金拾圓也の工面を申越されたことなどを記憶して居る。後者は、小田原の十字町に移られた時の手紙であるが、他の手紙に、『昨夜は熱も四十度を上下いたし候』とあつたやうに、この頃は、身體も惡かつたし金にも困つて居られたやうである。或る時の手紙などは、一枚の紙の眞中に大きく圓を描いて、それを二等分して一方を黑く塗つてあつたが、その白黑半ばする圓の下に、半死半生の體に御座候とだけ書いてあつ

た。秋水が小田原まで見舞に出掛けたのは、この手紙を受け取つた時であつたと覺えて居る。私はこの頃の綠雨氏の手紙の幾つかを大事に保存して居たが、秋水の亡き後も、幾度か繰り返して讀んで見ては、秋水と綠雨氏の友交を追憶した。後に、それらの手紙は秋水の詩稿などと一緒に、秋水の最も親しかつた三申小泉策太郎氏に寄贈したが、三申氏の亡き今日、私の思ひ出の數々を潜めたそれら一切は、一體何うなづて了つたであらうか。

日露の風雲急なる時、非戰論を稱へて、『萬朝報』を立ち去つた秋水と堺利彥氏の二人が、他の多くの同志と共に平民社を創立して、週刊『平民新聞』を發行したことは、世の人の好く知るところであるが、その頃になつて、暫らく姿の見えなかつた綠雨氏は、再び秋水を訪れて來られるやうになつた。その時には、もと〳〵痩せ削けて居られた綠雨氏は、見るからに病人らしく衰弱されてゐた。そして時々苦しさうに咳き入つて居られた。それでも誰れ彼れを冷罵し冷笑されながら、以前のやうな元氣だけは示されて居たが、秋水の話では、養生費はおろか生活費にさへ困つて居られるとのことであつた。で、秋水は堺利彥氏と相談の上、『もゝはがき』と云ふものを『平民新聞』に書いて頂くことにした。それは毎日一枚づゝ綠雨氏が葉書を寄され、一週間

分を新聞に掲載する仕組みであつたが、いづれ綠雨氏自身の考案になつたものであらう。『古今和歌集』所載の讀人知らずの歌、『曉の鳴の羽根垣もゝはがき君が來ぬ夜はわれぞ數かく』にその題名を採られたものゝやうに聞いて居る。最初は葉書百枚を掲載する豫定のやうであつたが、綠雨氏の死に依つて遂に百枚までは載らなかつたやうである。

『平民新聞』の創業當時、私は臨時會計係を申付けられて居たが、綠雨氏の『もゝはがき』に、幾ら支拂つて居たのか記憶して居ない。平民社も頗る苦しかつたから孰れ大した金ではなかつたことは明らかである。しかし社からの送金を待ち切れずに、何時も本所の横網から有樂町の平民社まで、綠雨氏は病軀を押して足を運んで來られた。或る時の如きは、昨日少し金が入用だつたので訪ねたかつたが、僅かな足代さへなかつたので行けなかつたと、悲痛な手紙を寄されたことがある。私はこの頃の綠雨氏の姿を見るに付け、幾度か心の中で秘かに同情の泪を流したか知れない。綠雨氏に支拂ふ原稿料の中に、秋水の小使錢が加入されて居たことは事實である。何時も秋水はこれを一緒に渡して置けと云つて、貧弱な財布の中から若干の金を取り出してゐた。もと〳〵綠雨氏は秋水の親友であつたから、平民社の金を使用する限り、秋水には堺氏に對する遠慮

があつたやうである。

或る日、私は秋水に向つて、私の保管して居る社の小さな手提金庫に、一杯金を入れたら幾ら入るだらうかと、子供のやうな質問をして見たことがある。すると、『奥さん、入れて御覽になつたら判るでせう』と、側に居られた綠雨氏が秋水に代つて答へられた。社の貧乏さ加減を知つて居た私は、若しその手提金庫に一杯金があつたなら、秋水や堺利彦氏が何んなにか樂だらうと、たわいもないことを眞面目に考へてゐた。で、見事にその夢を破られた私は、にや〳〵笑つて居られる綠雨氏が何んとなく怨めしかつたが、これが綠雨氏の皮肉の槍玉に擧がつた最後でもあつた。それから一ヶ月餘りの後に綠雨氏はあの有名な死亡廣告を遺して、貧困の中に惜しくもこの世を去られたのである。

小泉三申氏の追憶

三申小泉策太郎氏がこの世を去られてから、すでに十年餘りの年月が過ぎ去つて居る。小泉氏が幸德秋水と刎頸の交りのあつたことは、餘りにも世間周知のことであるが、秋水の死後、私までが直接間接並々ならぬ世話になり續けて來た。曾て『中央公論』に掲載された誰れかの『小泉策太郎論』の中に、小泉氏が私に米鹽の代を惠まれて居る由が書いてあつたが、事實秋水の死後、この世の生活に惱まされ續けた寄る邊ない私は、圖々しくも惡濃いまでに小泉氏の袖に縋つた。しかしその都度、何時も私に救濟の手を差し延べられたばかりではなく、思ひ掛けない時に多額の金子を惠與されたことさへ屢々あつた。過ぎ去つた曾ての日を回顧する時、五十年來の鴻恩を心から感謝すると共に、無量の感慨の中に追憶を新たにせずには居られない。と云つて、私の瞳の奥に浮ぶ思ひ出の小泉氏の容姿は、落語家の先代小さんに生氣を吹き込んだやうな、人の知るあの枯淡な晩年の面影ではなく、寧ろ才氣に溢れた若かりし日の小泉氏のそれである。想ふ

に、秋水の死後書信の往復以外には、稀れにしか面語の日を得なかつた故であらう。

私が小泉氏の名を知つたのは幸德家に嫁いでからである。勿論それ以前に、小泉氏はすでに知名の人となつて居られたのであるが、寡聞な私の知るよしもなかつた。私は小泉氏の名を知ると共に、『三申』と云ふあの奇妙な雅號に就いて說明されたが、秋水の話しに據ると、小泉氏は申の年の日の申の刻に誕生されたので、見ざる聞かざる言はざるの意味をも込めて、『三申』と自から號されたとのことである。そして見ざる聞かざる言はざるは、小泉氏自身が座右の銘だと稱して居られるとも云つてゐた。尤も小泉氏の誕生の日である明治五年十一月三日が、申の年の申の日に相當するか何うか私は知らない。

私達の結婚の日に小泉氏は心からなる賀辭を贈られたが、それは白扇に『秋水兄の結婚を祝して』と題して、『笑ひから福來たる門の凉み臺』と、自作の句が例の能筆で美しく書かれてゐた。そして『時雨庵』と落款してあつたと記憶して居る。で、私は小泉三申なる人を華奢な風流才子のやうに想像してゐた。ところが、或る日、鋭い金壺眼をした色の黑い頗る不愛想な大男が訪づれて來たが、秋水の紹介に依つてそれがあの白扇の贈り主である小泉氏であることを知つ

た。何處にも私の想像して居たやうな風流人らしい面影がないので、私は意外な感に打たれてその人を眺めたが、射るやうな一種特別の鋭い視線に出逢つて眼を伏せて了つた。因みに、世間並から云ふと、然う大男でもない小泉氏を私が大男のやうに感じたのは、秋水が並外れて小男であつた爲めかも知れない。

餘談ながら、今日では小泉氏の能筆は世間周知のことであらうが、禿筆で書かれたやうな少し肩上りの細長い書體には何んとも云ひやうのない古雅な風格がある。秋水の話しでは、中村不折の書を愛されたことがあるから、何處かにその感化があるとのことである。しかし其處ら邊りの政治家のそれのやうに、自分の書を矢鱈に振り廻されはしなかつたやうであるから、若しかすると知る人は少いかも知れない。小泉氏の書に就いて、私は堺利彦氏から興味ある話しを聞いて居る。秋水が捕縛された相州湯ヶ原の天野屋に、晩年の堺氏が清遊されたことがあつたが、天野屋では、秋水の事件以後めつきり客が殖えたと云つて、堺氏を下にも置かないほど歡待したさうである。その時、主人から乞はれるまゝに、堺氏は例の名筆で秋水の詩を書いて與へられたが、小泉氏がしば〳〵來遊される由を聞いて、小泉氏が隱れた能書家であることを告げると、天野屋の

主人は初耳だと云つて驚くと共に、今度來遊の時は是非秋水の詩を書いて戴くのだと、ひとりで定めて居たさうである。その後、果して目的を達したか何うか聞き及ばないが、若し小泉氏が秋水の詩を書いて與へられたとしたら、恐らくそれは他に類品のないものであらう。因みに、土佐の中村町にある秋水の墓碑の文字は、小泉氏の書かれたものであることを附言して置かう。

私が幸德家に嫁いだ頃の小泉氏は、頗る不愛想な何處となく取つ着きの惡い人であつたが、何うかするとその上に、思ひ掛けない皮肉な冗談を吐かれることがあつた。まだ年の若かつた私には、時としてその皮肉な冗談が憎らしくもあれば、また腹立たしくもあつた。一例を擧げると、何時であつたか母が私の食の細いことを心配して、そのことを小泉氏に話したことがある。すると、小泉氏はそれに應へて、何んでも或る家の嫁が餘り御飯を食べないので、姑が不思議がつてそれとなくそつと調べて見ると、家人の留守に牡丹餅を作つて喰べて居たさうだと、眞面目腐つた顏をして話されたが、その憎らしい月並の物語が終ると、意地惡く私の顏をじろつと一瞥されて、にやりと人の惡い微笑みを浮べられたことがある。しかし然うした皮肉な冗談も度重なるに從つて、何時とはなく左程不愉快でもなくなつたばかりではなく、それが小泉氏の愛想の一つで

あることをさへ知るやうになつた。

小泉氏の然うした皮肉な冗談を恐れたのは、唯だ單に私ばかりではなかつたやうである。或る時、秋水の母方の義理の叔母が同じやうな冗談の矢面に立たされたが、田舎育ちの人であつたゞけに、年甲斐もなくすつかり憤慨して了つたことがある。序でながら、この叔母は明治九年に熊本で起つた神風連の亂の時、暴徒の手で暗殺された有名な縣令安岡良亮の妹である。叔母を怒らした小泉氏の冗談の内容が、何んであつたか今では最う忘れて了つたが、例の通りの皮肉なものであつたことだけは微かに覺えて居る。その日、小泉氏の歸られた後で、何時までもぶり〳〵して居る叔母に向つて、小泉氏を知るところの深い母は、口は悪いが腹は竹を割つたやうな人だと、小泉氏の爲めにそれとなく熱心に辯じてゐた。

その時の母の話しに據ると、あのやうに皮肉な憎まれ口を利きながらも、小泉氏はなか〳〵女に好かれる人であつて、廣島の新聞社から東京に歸られた時などは、土地の藝者がはる〳〵後を慕ふて來たとのことであるが、それは小泉氏が口や顏に似げなく情の深い人であるからだと、母は殊更らに附け加へて說明してゐた。更らに母は、幾つかの例證を擧げて小泉氏の善き人柄を物

語つたが、中でもいたく私の心を打つたのは、糟糠の妻である安子夫人に對する愛情に就いてゞある。何んでも安子夫人が天然痘に罹られた時、人手を借りずに夫人を背負つて便所に通はれたが、視る目も麗しい到れり盡せりのその看護振りは、誰れにも眞似の出來ない程のものであつたとのことである。

秋水の話しに據ると、小泉氏は稀れに見る程の親孝行の人であつた。若しかすると、このことを知る人は少ないかも知れないが、親孝行の點では人後に落ちない秋水が、何時も感心して語つて居たのだから、私には小泉氏の孝行振りを推測することが出來る。面白いと云つては語弊があるであらうが、私は小泉氏の親孝行に關連した一つの逸話を知つて居る。或る時、小泉氏は秋水に向つて次のやうな話しをして居られた。何んでも鄕里から上京された父君を案内して、何處かの剛染の旗亭に行かれたところが、旗亭の人々は何んと考へたのか、上座に居られる父君を無視して、小泉氏を主として一切の應待をしたので、『上座を知らないのか！』と、癇癖の強い小泉氏の一喝に逢つたと云ふことである。その話しが終つた時、小泉氏は秋水に向つて、『これまで、こんな不快なことはなかつたし、こんな困つたこともないね』と、しみ〳〵した調子で云つ

て居られたが、秋水もまた日頃のへらず口を謹んで、成程と云つたやうな顔をして聽いてゐた。

小泉氏は非常に用心深いところのある人であつた。私が幸德家に嫁いだ翌年のことであるが、秋水の原稿書きの伴をして芝浦の旗亭に行つて居ると、小泉氏から電話が掛かつて來たので、電話嫌ひの秋水の命ずるまゝに私が電話口に出て、『幸德ですが……』と云ふと、言下に『ぢやあ、ない！』と、特色のあるあの皺枯れ聲で突放ねられて了つた。何んとも取り付きやうのない私の復命を聞いた秋水は、『幸德の代理だと云はないからだ、小泉の時は注意せねば駄目だよ』と、愚かな私をたしなめながら自分で電話口に出て行つたが、二人の間にどんな話しがあつたのか、部屋に歸つて來た秋水は、私を促して早速その旗亭を引き揚げた。私達の歸りを宅で待つて居られた小泉氏に、私が先刻の不注意を詫びると、『あれは奥さんだつたのですが、女氣の多い場所ですから、秋水の代理だとはつきり云つて聽かないと、別に秘密の話しでなくても、女の聲では迂濶に話しは出來ませんから、若しやと思ひましたが失禮いたしました』と云つて居られた。側で秋水は小泉氏と私の顔をこも〳〵眺めながら、なにが可笑しいのかひとりでにや〳〵笑つてゐた。尤も上述の話しは、小泉氏の用心深さを現はして居ると云ふよりも、寧ろ小泉氏の嚴格さを

物語るものと云つた方が適切かも知れない。ともあれ、秋水と小泉氏から注意された『代理』と云ふ言葉は、今でも二つの聲色で私の耳底にあり〳〵と消え殘つて居る。

ところが、その日の小泉氏の所用なるものが、また思ひ掛けない頗る妙なものであつた。と云ふのは、秋水に對して別に用があると云ふのではなく、實は先刻電話口で見事に擊退された迂愚な私に對して、折り入つて賴みがあると云はれるのである。しかも小泉氏の賴みと云ふのは、令妹のるい子さんを預つて少し躾けて呉れとのことであつた。一體私の何處に取り柄があつてそんな大事を賴まれるのか、私は返事に窮したばかりではなく、何んだか狐にでもつまゝれたやうな氣がしたので、我れともなく小泉氏の顔を見上げて居る間に、秋水が側から二つ返事で承諾して了つた。そして私の辭退を謙讓の美德だなどと冗談化して了つた。私はその器でないことは充分知りながらも、恐る〳〵その大役を引き受けることになつたが、小泉氏の豫期に添はなかつたことは事實である。しかしその後、御預りして居たるい子さんを引き取られる時、小泉氏は御禮だと云つて私に烏丸光廣卿の書を寄贈された。この掛軸は長く私の珍重したものであつたが、その後私の上に襲ひ掛かつた境遇の激變と共に、何時の間にか私の身邊から消え失せて了つた。

或る時、小泉氏は見馴れぬ婦人を同伴されて訪れられたことがある。何んでも新橋の待合の主婦だと云ふことであるが、何んと云ふ待合であつたか今では最う忘れて了つた。その艶麗な聲をした愛想の好い主婦が、堅氣の生活が見たいと云ふから、迷惑は承知の上で連れて來たとのことであつた。ところが、何うしたことか餘り冗談を云つたことのない秋水が、『僕が堅氣の標本とは驚いたね、新聞記者や原稿書きは堅氣とは云へないよ』と、何時になく妙にはしやぎながら冗談を云ふと、『勿論、君が堅氣の人間とは誰れも思はないが、奥さんの堅氣には異存はあるまい』と、小泉氏からものゝ見事に反駁されて了つた。すると秋水は、『そんなら女房に拜謁料を置いて行き給へ』と、苦し紛れに妙な要求を持ち出したが、『まあ落着き給へ、これから皆で芝浦へ行かうと思つて居るのだから』と、小泉氏は美しい主婦の顏を見ながら應へられた。上述のやうな珍問答があつたからではなからうが、その日、私までが芝浦の旗亭に伴はれて思はぬ御馳走になつた。その頃、友人の間に小泉氏の艶聞がいろ〳〵と噂されて居たが、同伴された主婦が噂の人であつたか何うか、私はその主婦の愛嬌に魅せられたばかりで、別に秋水に訊いて見もしなかつた。

嚴格な一面を持つて居られた小泉氏は、また常に癇癖の强い人でもあつたやうである。幸にも私は直接小泉氏から怒られたことはないが、好く癇癪玉を破裂さして居られるのを見受けたことがある。尤も若い頃から人間の出來て居た小泉氏のことであるから、理由なく人を怒られるやうなことは全然なかつたと思ふ。これは少し極端な例であるが、或る日、秋水から命ぜられた所用を果す爲めに、小泉氏を四谷の愛住町の邸に訪づれて行くと、庭の方から小泉氏の癇高い怒聲が玄關まで聞えてゐた。そして案内された私が座敷に這入つて行くと、小泉氏は庭の飛び石の上に佇んで居られたが、簡單に挨拶されると、下駄の跡が殘つて居る庭の芝生を指差されながら、私を相手に、今し方私と門の處で擦れ違ひになつた先客を罵倒され出した。何んでもその先客は小泉氏の茶室を拜見に來たのであるが、飛び石を無視して芝生の上を歩いたと云つて、『何んだ、茶室を見る柄か！』と、かん〳〵になつて怒つて居られるのであつた。恐らく小泉氏の癇高い罵聲は、歸つて行くその先客にも聞えたことゝ思ふが、私は何んだか自分が怒られて居るやうな氣がしてならなかつた。

小泉氏が何時頃から茶道に精進されたのか知らないが、いろ〳〵な點にお茶の湯式のところが

あつたことは、小泉氏を訪づれた人なら誰れでも氣付いたに相違ない。從つて、秋水のやうな無趣味な人間でなかつた小泉氏は、若い頃から盛んに骨董品を集めて居られたが、何時も晩日に買ひ求められると聞いて居たから、世間知らずの私は不思議でならないので、或る時、小泉氏にその理由を訊ねて見た。すると小泉氏は『道具屋も晩日には金が要るから、安く賣つて呉れますよ』と、笑ひながら頗る簡單明瞭に應へられたが、またしても私は自分の愚かさを晒け出して了つた。ところが、側に居た秋水が何にを思つたのか、『君の骨董品いぢりも好いが、何うもあれは細君泣かせらしいよ』と、變に意見めいたことを云ひ出すと、『然うかも知れない、時々は苦情が出て煩しくて困ることがあるよ。しかし今に禍ひ變じて福となるから』と、さも自信ありげに云ひ放たれて大笑ひされたが、果してその豫言通りに、晩年の小泉氏が人の羨むやうな美術品の蒐集家であつたことは、何にも私が說明するまでもなからう。

秋水はその時の都合次第で、何處でも關はず東京中を引越して廻る人間であつたが、小泉氏は極く若い頃から四谷區にばかり住んで居られた。私が知つてから兩三度引越されたやうであるが、何時も四谷區に限られて居て、しかも何の家も何の家も目と鼻の先ばかりであつた。秋水の

話しに據ると、このやうに小泉氏が四谷區を動かうとされないのは、活動の地盤を四谷區に作られる爲めだとのことであつた。然うした種類のことは私には好く判らないが、或ひは秋水の言葉通りであつたかも知れない。後日麻布の南部坂に邸宅を移された時には、最う押しも押されもしない社會的地位を占めて居られた。尙、人の噂では、後年の小泉氏は巨萬の富を積んで居られたやうであるが、若い頃の小泉氏は然う有福ではなかつたやうである。しかし何時も堂々たる住居を構へて居られたし、家の中では火の車を廻されながらも、車夫を置いて抱へ車を走らして居られた。それに對して秋水は、『眞似をしやうにも、小泉のあの眞似だけは誰れにも出來ない』と、何にかことのある度毎に、感歎したやうな呟きを洩らしてゐた。

人の知るやうに、小泉氏は友情に厚い世話好きの人であつたが、或る時、安子夫人が私に向つて、妾のやうな話しをされたことがある。それは安子夫人が小泉氏に嫁がれて間もなくのことである。所用の爲めに外出された夫人が歸宅されて見ると、留守の間に顏馴染みの來客があつて、ビールなどを飲みながら盛んに談笑して居られたが、何時の間にか簞笥の中はすつかり空になつてゐた。で、驚きの餘り小泉氏を別室に呼んで、そつとその由を告げられると、小泉氏は事もな

げに、『友達同志は皆なこれだよ』と云はれたさうである。云ふまでもなく、座敷でビールを飲んで居る客の急を救ふ爲めに、夫人の留守を利用して、家族の衣類一切を入質されたのである。

私はこの話しを聞いた時、若しやその客は秋水ではなかつたかと思つたので、『秋水だつたのですか』と訊いて見ると、『いゝえ、幸德さんではありません』と答へられたので、安堵の胸を撫で下ろしたことを記憶して居る。

小泉氏と秋水との友交に就いては、これまで小泉氏自身もしば〳〵書かれたことでもあり、また餘りにも世間に知れ渡つて居ることであるから、今更ら何にも私などが繰り返す必要もなからう。しかし實際は、世間の人々が想像されて居るよりも遙かに深い交りであつたから、人の知らない幾つかの逸話を述べて見やう。秋水は理財に就いて頗る無關心な人間であつたが、この點が親友の小泉氏を最も憂ひしめたやうである。で、小泉氏は何にかことある毎に、秋水の無關心さを戒めて忠告されたやうである。或る時の如きは、最う獨身ではないのだし親もあることだから、少し蓄財と云ふことを考へては何うかと、情理を盡された長い〳〵手紙を寄されたことがある。そしてその手紙には秋水の老年を戒めて、『曉の嘘けうとし秋の風』と云ふ句が書いてあつ

た。しかし秋水は小泉氏の忠告を感謝しながらも、相變らずの無關心振りを發揮してゐた。

秋水が『萬朝報』に居た頃には、多少ながらも定收入があつたから好いやうなものゝ、平民社を創立して社會運動の第一線に乘り出してからは、殆んど定まつた收入と云ふものがなくなつて來たので、軍用金をしば〳〵小泉氏に仰いだ。で、小泉氏の心配は並大抵のものではなかつたやうである。或る時、某會社の權利株を持つて來られて、これをやるから大事に仕舞つて置け、なにかの時の用意になるだらうからと、秋水に手渡して歸つて行かれたことがある。ところが、然うした物を持ち付けない秋水は、その株券を可笑しいほど荷厄介にして居たが、日ならずして小泉氏には內密で賣り飛ばして了つた。そしてしこたま書物を買ひ込んでひとり悦に入つてゐた。これには小泉氏も少々呆れ返られたやうであるが、今度は有る時拂ひの催促なしで家を建てゝやるから、圖面でも引いて見たら何うかとのことであつた。これだけは秋水も多少食指が動いたと見えて、二三日は書齋に閉ぢ籠つて怪しげな圖面を引いて居たが、何時の間にかそれも止めて了つた。そして小泉氏に向つて、折角家を建てゝも金に困ると、相談する前に、屹度賣り飛ばすに違ひないから止めたと云つてゐた。さすがの小泉氏も、この時から秋水の蓄財には匙を投げて了

はれたやうである。それでも、『僕の眼の黒い中は不自由はさせないから、金の入用の時は取りに來給へ』と云つて居られた。事實、迫害の爲めに手も足も出なくなつた晩年の秋水は、その生活費の殆んど全部を小泉氏に仰いで居たのである。

秋水がまだ『萬朝報』に居た頃だと記憶するが、秋水と小泉氏とが揃ひの着物を作つたことがある。黒羽二重の羽織に、同じく羽二重の鼠色の着物であるが、上下共に、自の定紋付きであつた。勿論小泉氏の考案に依つて作つたものであるが、そのお揃ひを着て二人で遊び歩いたのだから、何んと云つても小泉氏も秋水も若かつたものである。小泉氏の亡くなられる數年前に、あの思ひ出を書き記して、私から小泉氏に送つた手紙の返事に、『秋水のことは老いるに從つてます〳〵記憶の新らしくなるを覺え、時々夢裡に相逢ふこともあるほどに候』とあつた。堺利彦氏の話に據ると、小泉氏は秋水の傳記を書くべく計畫されて居たが、如何なる事情か中途で止められたやうである。小泉氏が中央公論に載せられた秋水の思ひ出は、確かその時の副産物であつたと記憶して居る。ところが、『中央公論』のあの原稿料は二度とも、堺利彦氏の計らひで、堺氏を通して私が頂戴して了つた。そして堺氏から小泉氏に事後承諾を求められた時、堺氏宛に、『原

稿料横領の件承知仕り候』と云ふ返事があつたが、一言の苦情も云はれはしなかつた。

十年近くも面語を得ないで居るうちに、小泉氏はあの世へと旅立たれて了つたが、生前手紙だけは時々戴いてゐた。最後に鎌倉の別莊から戴いた手紙には、『半病人狀態なるに加へて、三界無安猶如火宅、人間相應の不快なる事どもありて云々』と、小泉氏らしからぬ文句があつたが、世間的には功なり名を遂げられた小泉氏にも、人知れぬ惱みがあつたのであらう。若し然うだとしても、すでに柩の蓋に釘を打たれた今は、この世の一切の苦から脱れ去つて安らかに眠つて居られることであらう。若しかしたら、あの世で秋水とこの世の思ひ出を語り合つて居られるかも知れない。

夫・幸德秋水の思ひ出

師岡

〔20086〕

昭和二十一年六月二十五日　印刷
昭和二十一年六月三・十日　發行

〔定價　五圓五拾錢〕

著者　師岡千代子　東京都杉並區上荻窪二ノ八
發行者　龜井義雄　東京都麹町區九段二ノ一
印刷者　横尾弘明　東京都麹町區九段二ノ一
印刷所　國際印刷株式會社　東京都杉並區上荻窪二ノ八
發行所　株式會社　東洋堂　東京都神田區淡路町二ノ九
配給元　日本出版配給株式會社

筐底を出でた血の記録

北條 仮編

嵐の中の書信

定價 十五圓 〒(一・五〇)

忽然としてその巨姿を現はし今や人民の先頭に立つて果敢に闘ひつゝある日本共産黨の指導者 徳田球一、野坂參三、志賀義雄及び故河上肇、市川正一、岩田義道、國領五郎、是枝恭二、高橋貞樹等々が十數年の長きに亘り獄中にありてその信念に徹し周囲の人々に宛てたる書信集。一文化史家の筐底深く祕められし他に類なき血の記録である。非合法黨時代日本共産黨の指導部は正に獄中に在つた。

東京都杉並區上荻窪二ノ八

隆文堂

〔光風叢書〕

岡本良知著

「漁村」記

定價 三圓五〇錢(〒五〇)

單なるルポルタージュではない。漁村に住み漁民と共に同じ鹹からい濱風を呼吸した著者の限りなき愛情の書であり、時代の良識が、日本の肉體保持の上に大きな役割を持つ漁村漁民への忠告の書でもある。

〔雑誌〕

七月創刊 「漁」 定價 三圓五〇錢(〒三〇)

水産日本の確立は漁村漁民のみが負擔すべきではない。日本人全體の正しき理解と協力によつて始めて達成される。この意味に於て、本誌は關係者のみを對象とする所謂專門誌の殻を蟬脱して七千萬人の水産教室としてスタートした。

株式會社 東洋堂 刊

製本控 伺第號

1008圓 1944號 年 月 日

書名 夫幸德秋水の思ひ出

著者 岡田ケイ子

受入 昭和19年7月4日

備考 申

1008
1944

₹ 5.50

終